

公立図書館史研究における黒人：人種隔離を中心として（文献展望）

川崎 良孝

Segregation, Public Libraries and the American Library
Association: A Literature Review

Yoshitaka KAWASAKI

はじめに

筆者は『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会：理念と現実との確執』（京都大学図書館情報学研究会発行，日本図書館協会発売，2006）で、アメリカ南部に地理的対象を絞り、黒人への公立図書館サービスが開始される20世紀初頭から、公立図書館での人種隔離が撤廃されアメリカ図書館協会が人種隔離撤廃を制度化する1960年代初頭までを取り上げて、アメリカ公立図書館の動きをまとめてみた。1960年代初頭を区切りとしたのは、人種での図書館利用の差別撤廃を明確にアメリカ図書館協会の方針に組み込んだ『図書館の権利宣言』第5条（人種統合条項）の採択（1961）、アメリカ図書館協会として人種隔離への制度的な統制を設定した『個人会員、支部資格、および施設会員に関する声明』の採択（1962）、およびアメリカ図書館協会として最初で最後の図書館と人種差別の実態を調査した報告書『公立図書館へのアクセス』の刊行（1963）を意識していた。

『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会』の目的は2つあった。1つは南部公立図書館での黒人へのサービスの実態を骨太に描くことである。次にアメリカ図書館協会が示す図書館における人種隔離への態度を解明することである。アメリカ公立図書館史をみると、「すべての人びと」、「最大多数の人に最良の本を」、「民衆の大学」、「人びとの宮殿」という言葉が飛び交っているのだが、あらゆる意味で図書館利用を制限されているグループがあり、そうした最大のグループが黒人であった。『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会』は上記の2つの解明を目指していたのだが、それは黒人への公立図書館サービスを探ることで、アメリカ公立図書館や公立図書館界の主流となる考えの特徴や限界を浮かび上がらせることに、最終的な目的があった。それはまた、周縁部あるいは周縁部への主流の態度をみることによって、主流となる部分の公立図書館への基本的姿勢を浮かび上がらせるという試みでもあった。

この目的が達成されたか否かはともかく、研究は既存の研究の上に積み上げるにしろ、既存の研究そのものを批判し新たな土台を構築するにしろ、いずれにしても既存の研究の少なくとも重要な業績については網羅的な検討が欠かせない。『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会』でこうしたいわば研究史に関わるのは、「序論：すべての人びとへのサービスとアメリカ公立図書館」の第7節「研究の状況と本書の構成」であり、「7.1 研究の状況」については、わずか4ページをあてたにすぎない。そして「7.1 研究の状況」で示したのは、

重要な文献の展望や問題点の指摘ではなく、単に公立図書館史における黒人研究が非常に遅れているという指摘をする内容であった。

本稿はアメリカ公立図書館と人種隔離を中心に、一定の網羅性を備えた文献展望を行うことで、『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会』の欠落部分を補うと同時に、今後の研究の土台を構築しようとするものである。人種は、ジェンダーや階級とともに図書館における批判的研究の中核を占める。そうした意味からすると、黒人と図書館に関する歴史的研究の「すべて」を視野に入れるべきかもしれない。しかし本稿は「すべて」を取り込まず、アメリカ図書館史における最も強固な制度的差別である人種隔離と公立図書館の関係を中心に扱う。すなわち指導的黒人図書館員の伝記、黒人図書館員の養成教育の歴史、具体的な図書館サービスの歴史、あるいは北部での黒人への図書館サービスの歴史といった側面は最小限にとどめ、注で重要な文献を指摘する。

諸業績をみた場合、例外的な業績はともかくとして、黒人と図書館に関する歴史的研究は1970年代に入って散見されるようになった。それまでは歴史を扱っていても歴史研究とはいえなかった。こうした筆者の認識、および現実の歴史の上に諸々の業績をのせたいという関心から、本稿の構成は以下のようになっている。なお南部での公立図書館の発展は19世紀末からであり、黒人への図書館サービスが開始されるのは白人への図書館サービスから遅れ、20世紀初頭が起点となる。

まず第1章「黒人と公立図書館：1960年まで」は3つの節で構成し、第1節では20世紀初頭の南部での公立図書館の成立から1960年までを概説し、第2節では同時期のアメリカ図書館協会の対応を骨太に描く。同時にそこで取り上げた事項について研究に関わる最低限の文献や原資料を注で掲げている。そして第3節では、この時期の主要な文献を解説した。そこでは隔離の状況を調査した文献から南部の図書館状況を全体的に解明した文献まで、比較的幅広く選んでいる。

歴史学、教育学などでは、一般的に「分離すれども平等」の法理を否定した1954年のブラウン事件判決 (*Brown v. Board of Education*) を時代区分とする場合が多い。しかし公立図書館と人種隔離についてはブラウン事件判決が大きな直接的な転機になるとはみなしがたい。とりわけ南部公立図書館での隔離撤廃運動やアメリカ図書館協会の対応をみると、むしろ1960年頃で時代区分をするのが適当だと思える。そうした判断から、第2章「公立図書館での隔離撤廃と黒人の主張の時代：1960-1970年代」を設定し、第1節と同じように3つの項目を設定した。第1節では隔離撤廃を求める裁判を取り上げて図書館における人種隔離を概括した。第2節では制度的差別に反対するにいたったアメリカ図書館協会と、そこから生じたいっそう大きな問題を描いた。同時にそこで取り上げた事項に関わる最低限の文献や原資料を注に掲げた。第3節ではこの時期の主要文献を解説しているが、アトランタ大学での修士論文および当時の黒人図書館運動を代表するE.J.ジョズィー (E.J. Josey) の業績とその特徴を中心にまとめている。

第3章では、1970年代以降の黒人と図書館、とりわけ南部での人種隔離に関する業績を、主に図書館史研究プロパーの業績に焦点を絞って紹介し、検討する。基本的には単行書を取り上

げているが、重要な文献については雑誌論文も紹介した。本章ではまず第1節で「全体的な研究の状況」を概説し、以下の節の導入部分としている。そして第2節では人種隔離に焦点をあてた包括的な論考を示し、第3節では黒人図書館史研究に限定した単行書や博士論文を紹介し、その特徴と限界を示している。最後の第4節では第2節と第3節の内容を各論的に深めた論考、および南部図書館史と黒人を扱うのに無視できない文献を幅広く紹介している。最近の図書館史研究の動向を反映して、原資料や手書き資料などにもとづく研究論文が増えており、こうした個別実証論文は以前と比べると質が向上している。

1章 黒人と公立図書館：1960年まで

1.1 黒人と公立図書館（概観）：1960年まで

・南部公立図書館の成立と発展：19世紀中葉に公立図書館が制度として成立したのだが、南部での公立図書館設置は人種隔離が結晶化される19世紀末から20世紀初頭に開始される。これには州レベルでの図書館法の採択、州図書館委員会や州図書館協会の設置を含む。また公立図書館設置にはA.カーネギー（Andrew Carnegie）の資金援助が大きい。そしてほぼ例外なく白人用の図書館が先発し、黒人用の図書館は後発した。例えばアトランタの場合、公立図書館の開館は1902年だが、黒人用の図書館の開館は1921年であった¹⁾。もちろん黒人用の図書館を用意したのは大きな都市で、中小の自治体では白人用の図書館だけがあり、黒人用の図書館はなかった。なお公立図書館の全般的な設置は、自治体での図書館の設置、州の補助（州図書館委員会の設置や巡回文庫）やカウンティ・ライブラリーの開始、それに戦後の連邦補助（1956年に成立した図書館サービス法（Library Services Act））という順序で進んでいく。この図式自体は北部と相違はない。ただし1934年に開始されたテネシー流域公社（TVA）による図書館活動、および1941年から1949年まで続いたテネシー流域図書館会議（Tennessee Valley Library Council）による活動²⁾、さらに時代は下がるが、例えば1964年に行われたフリーダム夏期プロジェクトなどは黒人に関係する南部特有の図書館活動と位置づけられる³⁾。

・南部公立図書館での黒人への図書館サービス：1896年のプレッシー対ファーガソン事件（*Plessy v. Ferguson*）⁴⁾で、合衆国最高裁は「分離すれども平等」の法理を確立した。とにもかくにもサービスが存在するという意味での「平等」を考えると、上述のアトランタ公立図書館の場合は、1902年から1921年まで、この法理にさえ抵触していたし、中小の自治体でも同じであったろう。1954年のブラウン対教育委員会事件（*Brown v. Board of Education*）⁵⁾で、合衆国最高裁は分離自体を不平等とし、そののち公教育や高等教育では人種隔離撤廃をめぐる激しい闘いに入っていくのだが、公立図書館の場合、そうした目立つ闘いはなかった。また学校、バス、プールなどと比べて時期的に早くから、そして静かに人種隔離撤廃がなされていった⁶⁾。

・黒人への図書館サービスの管理運営方式：こうした人種隔離された黒人用図書館の管理運営面をみると、いわゆるルイヴィル（Louisville）方式が主流であった。この方式は、1つの図書館管理機関すなわち白人からなる図書館理事会を設けて、その下に黒人専用の分館を設置し、その運営を黒人が担当するという方式である。いま1つシャーロット（Charlotte）方式

があり、これは白人と黒人でまったく別途の図書館管理機関を設けるものである。黒人図書館理事会と白人図書館理事会を別途に設置し、おのおのが独立してサービスをする。この方式はたいして広まらず、シャーロット市自体が1929年にルイヴィル方式に移行してしまった。ルイヴィル方式は図書館管理にたけた白人の統制下に、黒人用図書館を黒人が運営するのだが、概して黒人図書館員自体がこの方式を支持していた⁷⁾。

・南部の図書館を指導したルイヴィル公立図書館⁸⁾：南部の大都市ルイヴィルが黒人への図書館サービスのみならず、南部の図書館に大きな影響力を持ち得たのは、北部の先進的な図書館に匹敵する抜きん出た図書館費や活動実績に加えて、館長のウィリアム・F.ヤスト(William F. Yust)やジョージ・T.セトル(George T. Settle)、それに黒人分館長のトマス・F.ブルー(Thomas F. Blue)といった幹部がアメリカ図書館協会、南東部図書館協会(Southeastern Library Association)⁹⁾、ケンタッキー州図書館協会などで活発に活動したことも大きい。それにルイヴィル公立図書館が図書館員養成学校を設置し、黒人図書館員を養成したことも無視できない。黒人図書館員の養成は1910年から始まり、ルイヴィルで訓練を受けた黒人図書館員が、南部の図書館で実際にサービスを担ったのである。そして1925年には黒人図書館員の養成機関としてハンプトン・インスティテュート(Hampton Institute)が設置され、ルイヴィルでの養成は引き継がれていく。なおルイヴィルの養成が正式に終結したのは1931年である。

・黒人図書館員の養成学校¹⁰⁾：このハンプトン・インスティテュートは黒人の大学であった。カーネギーの寄付を得て黒人図書館員を大学で養成することになったが、その場合、アメリカ図書館協会はタスキーギ・インスティテュート(Tuskegee Institute)とハンプトンを候補にあげた。タスキーギは黒人による黒人のための大学で、ハンプトンは白人による黒人のための大学であった。ここでも白人の統制下による黒人図書館員の養成が、特に効率性の観点から重視されたのである。すなわち図書館サービスにおけるルイヴィル方式を黒人図書館員養成についてもそのまま持ち込み、それを最良の方式とした。それはまた図書館員養成での人種隔離を徹底することでもあった。

・黒人図書館員の反応：南部公立図書館では白人の統制や指導のもとに黒人図書館員が黒人にサービスをしたが、そうした方式を黒人図書館員自体も肯定的に受け取っていた。少なくとも主要図書館関係雑誌に黒人からの問題提起はない。人種隔離にたいする黒人による問題提起は、1960年12月号の『ライブラリー・ジャーナル』に現れるライス・エステス(Rice Estes)の論文「隔離された図書館」を待たねばならなかった¹¹⁾。

1.2 黒人とアメリカ図書館協会(概観)：1960年まで

・アメリカ図書館協会の基本的姿勢：アメリカ図書館協会が黒人の問題に最初に関わったのは、南部で最初に開かれた1899年アトランタ年次大会であった。このとき黒人の登壇を求める声が舞台裏で上がったのだが、図書館協会の最高幹部は黒人の登壇に躊躇するとともに、その最終的な判断をアトランタの当地実行委員会の判断に委ねた。すなわち全国的な専門職団体であるアメリカ図書館協会の問題とは把握せず、むしろ南部という1つの地方(region)の問題

であり、そこで処理されるべき問題と捉えたのである¹²⁾。この判断はアメリカ図書館協会の基本的な考えとして引き継がれていく。1960年モンリオール年次大会でも会長ベンジャミン・パウエル（Benjamin Powell）が、地方の管轄範囲に介入できないし、介入するつもりもないと明言していた¹³⁾。これが1960年までのアメリカ図書館協会の基本的な姿勢であった。

・黒人への図書館サービスの扱い：アメリカ図書館協会を舞台とする動きでは、1913年大会でのウィリアム・ヤストの発表と雑誌論文¹⁴⁾、それに1921年から1923年にかけての黒人サービス・ラウンドテーブル（Work with Negro Round Table）の成立と崩壊¹⁵⁾を無視できない。前者は実態調査にもとづいて、アメリカ図書館協会の正式機関誌に黒人への図書館サービスを発表した最初の論文である。黒人への図書館サービスの現実と課題を全国に知らしめた点、管理運営方式としてルイヴィル方式を明確に主張した点で重要な位置を占める。一方、黒人サービス・ラウンドテーブルの成立と崩壊については、いっそう複雑な問題をはらんでいる。このラウンドテーブルの指導者は、ニューヨーク・パブリック・ライブラリーの135番街（ハーレム）分館のアーネスティン・ローズ（Ernestine Rose）と、ルイヴィル公立図書館のジョージ・セトルであった。この時点で、黒人への図書館サービスは南部の問題にとどまらず、北部の課題でもあることが認識されたのである。その場合、ローズとセトルという両指導者は、南北に固有の事柄には触れずに、黒人利用者への具体的なサービスの在り方を検討する場として、ラウンドテーブルを構想し、組織化しようとした。しかしながらどのような側面をとっても、結局は南北の固有の状況に戻り、黒人サービスを共通のテーブルにのせることは不可能との結論になった。1899年のアトランタ年次大会で、黒人の問題を「地方」の問題とした。こうした姿勢は黒人サービスを直接的に扱うラウンドテーブルを組織化するときに、いっそうはっきりした。全国団体であるアメリカ図書館協会は地方の問題に関わらないということであり、黒人にまつわる問題を地方に押し込めるという姿勢である。これがアメリカ図書館協会の基本的姿勢であり、上述の1960年のパウエルの言及にいたるのである。

・人種隔離への先駆的対応：とはいうものの、アメリカ図書館協会が隔離に反対する何らの具体的措置も取らなかったということではない。アメリカ図書館協会は1936年のリッチモンド年次大会にまつわる出来事で、具体的措置を講じている¹⁶⁾。この大会に黒人は参加できたものの、白人と同じようには会議や食事会に参加できなかった。この点に批判が集まり、「アメリカ図書館協会の大会や協会の統制下にある会議の場合、全会員があらゆる部屋や会場の利用に関して完全に等しく扱われなくてはならない」との具体的方針を初めて採択した¹⁷⁾。この方針は実質的に南部での大会開催を慎むことを示している。しかし同時に、「大会での差別は図書館協会が課したものではない」、「全般的な社会的、個人的な差別という領域を扱うのは、本会の管轄範囲ではない」とも述べてもいる。こうした姿勢は、全国的な専門職団体である協会は地方の問題を扱わないとの従来の態度と変わるところはない。これは南部において、図書館における隔離や分離を認めることに他ならない。アメリカ図書館協会は人種隔離全般に積極的に反対の行動を取るとか、黒人の基本的人権を守るという措置を取るとはなかった。むしろそうした問題を回避したのである。なお1954年のミネアポリス年次大会で各州には1つの州支部しか認めないと決定し、1956年冬期大会を期限に州支部の再認定を実施した¹⁸⁾。このときジョー

ジアとアラバマは条件を満たせず、両州には州支部が存在しないことになった。1936年と1954年の措置は重要ではあるが、先駆的で限定的な例と考えてよい。

1.3 黒人に関する図書館史研究の業績：1960年まで

単行書や全国的雑誌で黒人に限定した図書館史の業績はほとんどない。したがって本項目では比較的広範囲に文献を拾っている。またそうした文献を年代順に並べてみた。1977年にE.J. ジョズィー (E.J. Josey) とアン・A. ショックリー (Ann A. Shockley) は『黒人図書館学ハンドブック』を編纂して刊行した。同書の冒頭にはジョズィーとキャスパー・L. ジョーダン (Casper L. Jordan) が作成した「黒人図書館学年表」が掲げられ、「1913 ウィリアム・ヤストは初めての試みであろうが、アメリカ公立図書館における黒人の状況を解明しようとした」¹⁹⁾との記載がある。このヤストの論文「黒人や黄色人種への図書館サービス」が黒人への図書館サービスの実態を解明した最初の文献とされる²⁰⁾。ヤスト論文は9ページで、(1)「学校・大学図書館」、(2)「全般的な傾向」、(3)「黒人用の図書館を有する市」、(4)「運営方式」、(5)「巡回文庫」、(6)「黒人の読書傾向」、(7)「結論」という7つの節を設けているが、ヤストの関心は公立図書館にあった。当時の南部で公立図書館を有する20の都市のうち黒人へのサービスを行っているのは8つである。同論文で特に重要なのは、実態調査にもとづいてアメリカ図書館協会の正式機関誌に黒人への図書館サービスを発表した最初の論文であること、黒人への図書館サービスの現実と課題を全国に知らしめたこと、および管理運営方式としてルイヴィル方式、すなわち白人の主導下に黒人分館の設置（白人と黒人の分離）を主張した点にある。なおヤストの1913年論文は常に指摘されるのだが、同論文に匹敵する分析が1916年の南東部図書館協会の会議録に掲載されており、当時の状況を知る基礎資料になる²¹⁾。この種の地方雑誌にはこうした客観的調査報告が多いと思われる²²⁾。

1922年にはアメリカ図書館協会に黒人ラウンドテーブルを設置する試みの一環として、ニューヨーク・パブリック・ライブラリー135番街分館が全国の主要都市約100館を対象に黒人へのサービスの実態調査を行った²³⁾。そこではサービスの運営方式とともに、黒人職員の有無や養成法、および図書館理事会への黒人の参加方法などを問うている。前者については、ルイヴィルの養成クラスに入る、白人の館長や上司から訓練を受ける、それに州図書館委員会が開催する整理技術の研修会に参加するという3つの方式があったとした。そして黒人図書館員養成は嘆かわしい状態にあるとまとめている。翌1923年にはヒューストン公立図書館のジュリア・アイデソン (Julia Ideson) が南部の約80の図書館を対象に、35館からの回答を分析して、黒人ラウンドテーブルで発表した²⁴⁾。それによると35館のうち23館は何らかの黒人へのサービスを実施していた。同報告をみるとルイヴィルの黒人分館のサービスが目立っている。

ルイス・ショアーズ (Louis Shores) が1930年に『ライブラリー・ジャーナル』に発表した「黒人への公立図書館サービス」も同じような実態調査である²⁵⁾。そこでは黒人人口が大きい都市80館に調査票を配り、75館から回答を得ていた。この調査の副題「黒人図書館員養成に関する現状」が示すように、特に黒人図書館員の養成を意識した調査であった。ショアーズは黒人へのサービス拡大を期待し、そのためにはさらなるローゼンワルド基金 (Rosenwald

Fund) からの資金、いっそう多くの黒人図書館員、それに黒人読者層の拡大が必要であると主張した。

広い展望のなかで黒人への図書館サービスを扱ったものとして、ルイス・R.ウィルソン (Louis R. Wilson) が1935年に発表した『南部でのカウンティ・ライブラリー・サービス』²⁶⁾がある。大恐慌の時代に黒人への図書館サービスに最も寄与したのはローゼンワルド基金であった。ウィルソンは同基金の実験プログラムに焦点をあて、社会状況や経済状況も視野に入れつつ、図書館の現状と課題を分析している。この実験プログラムについて、サービスは不十分で非効率としつつ、カウンティ全域へのサービスという考えは支持し、また同基金の取り組みが社会的、教育的向上に貢献しているという点では高く評価した。さらに人種隔離は貧しい資源をさらに散逸させており、南部の図書館の発展は遅れ、なかでも黒人へのサービスは最も遅れていると指摘した。同書は勧告の1つを黒人サービスにあて、「黒人へのサービスの向上」、「図書館にたいする黒人自体の関心の育成」、「いっそう多くの図書の提供、建物の向上、それに黒人図書館員への教育や研修の強化」を訴えている²⁷⁾。

翌年にはアメリカ図書館協会が派遣した南部の地域専門家 (regional field agent) トミー・D.バーカー (Tommie D. Barker) が『南部の図書館』²⁸⁾を発表した。同書は1930年から1935年までの図書館の発展を示し、第8章で黒人を扱っている。そこでは黒人分館の設置とローゼンワルド基金によるサービスを取り上げている。1926年の時点では南部の89.5パーセントの黒人が図書館サービスを受けられなかったが、1935年には83パーセント (白人黒人全体では66パーセント) になり、徐々にサービスの進展がみられるとした。また黒人分館設置の増加を指摘したが、それらは白人用図書館に公費を投入しているので、設置は満足感ではなく一種の罪悪感によると記した。最終章は15点の勧告を示している。そこでは「各館による包括的サービス」、「成人教育」、「村落部の生活の認識」など多くの項目を挙げているが、黒人への言及は皆無であった。

1938年に図書館学および図書館界の指導者ルイス・R.ウィルソンが発表した『読書の地理学』²⁹⁾は、全国の図書館状況や読書関係機関、それに新聞や雑誌なども調査した包括的な研究書である。同書は黒人への図書館サービスを散発的に扱っている³⁰⁾。低い識字率、それに人口、地理、経済の状態が、南部の公立図書館とりわけ黒人の図書館サービスの遅滞に大きく影響しているとした。それに「図書での学習」は黒人に無意味との考えが根強く、この考えも黒人への図書館サービスを遅れさせているのである。

エリザ・A.グリーソン (Eliza A. Gleason) は、図書館学で博士号を獲得した最初の黒人であるとともに、博士論文をもとに1941年に刊行された『南部の黒人と公立図書館』³¹⁾は、現在でもこの分野で最も包括的な研究書としての位置を保っている。第1章「歴史的背景」を前置きに、第2章「南部黒人への公立図書館サービスの法的基盤」、第3章「統治組織」と法的考察が続く。さらに第4章「黒人図書館サービスの地理学」、第5章「財政と管理」、第6章「図書館内の管理と運営」と黒人への公立図書館サービスをマクロ、ミクロの両面から検討している。そして第7章では独立型の黒人図書館 (シャーロット型) を分析し、第8章では私立の黒人中等学校や黒人大学との関わりを探っている。また調査によって当時の黒人図書館サービスの実態

も明らかにした。運営形態の場合、南部の60以上がルイヴィル方式を採用していたが、グリーンソンは黒人と白人の図書館理事会を別途に設置し独立してサービスをするシャーロット方式を支持している。この点だけを見ると、グリーンソンは人種隔離を支持しているように思われるが、決してそうではない。同書は黒人への公立図書館サービスの法的基盤を深く検討し、そこから図書館での隔離撤廃を導いているように思われる。グリーンソンは「分離すれども平等」を規定した1896年のプレッシー事件判決を厳格に読み、「平等な」サービスの場合には隔離が可能であると解釈する。しかし南部の経済状況からしても「平等」は実現できない。これは全国黒人向上協会（NAACP）が人種隔離と闘うために1954年のブラウン事件判決まで用いた法廷での戦術でもある。おそらくグリーンソンは人種統合をした1つの高質の公立図書館サービスを望んだのであろうが、それを明示してはいない。

グリーンソンの図書が刊行された1941年といえば、黒人大学のアトランタ大学に図書館学校が開設された年であった。開設を記念して会議が開かれたのだが、その論集が刊行されている³²⁾。この会議にはルイス・R.ウィルソン、ウィリアム・W.ビショップ（William W. Bishop）、カーネギー財団のフレデリック・P.ケペル（Frederick P. Keppel）、それにトミー・D.バーカー、エリザ・A.グリーンソン、アーネスティン・ローズ、フローレンス・R.カーティス（Florence R. Curtis）、ルイス・ショアーズなど錚々たる指導者が参加して発表した。黒人図書館員の養成に関する会議であるが、南部の黒人への図書館サービス全般も扱っており、当時の南部の図書館状況と指導者の考えが理解できる。グリーンソンは「分離すれども平等」の「平等」をめぐる法的、実践的な考察をしており興味深い。『南部の黒人と公立図書館』と同じように、隔離自体を直接的に非難するという形はとっていない³³⁾。

第2次大戦後の実態調査では、バーミングハム公立図書館長エミリー・M.ダントン（Emily M. Danton）が発表した1948年の調査がある³⁴⁾。同調査は南部の22の公立図書館を対象にしている。題目「南部は制限が緩みつつある」が示すように楽観的な内容になっている。多くの館は必要に応じて黒人に中央館の「利用」を許していると回答しているが、実態は中央館から黒人分館に資料を回すといった場合が多く、決して白人と同じサービスを提供しているのではないとした。人種統合の回答は2館にすぎず、ダントンのバーミングハム公立図書館自体が厳格な人種隔離を行っていた。

翌1949年にはルイス・R.ウィルソンを編者として『南東部の図書館』³⁵⁾が刊行された。南東部9州を対象とするこの包括的な図書館調査は、図書館数、利用、財政、給与、図書館員、蔵書冊数、貸出冊数など、州を単位に比較している。さらに州図書館協会の活動、慈善団体などにも触れている。第7章「黒人への図書館サービス」の場合、州ごとの黒人と白人の比率、公立図書館サービスを受けていない白人と黒人の比率、黒人が5千人以上の町の図書館費や蔵書冊数や貸出冊数、白人との給与の比較などを行い、いずれも具体的数値をあげている。結論として、南東部の黒人の66パーセントは図書館サービスを受けておらず、州の公立図書館振興機関はこの状況を改善できるとした。同書は「制限なしに黒人へのサービスを提供している市はほとんどない」³⁶⁾と分析しているが、それ以上の言及はなかった。

1954年といえばブラウン事件判決が出された年である。アナ・ホールデン（Anna Holden）

が1954年1月号の『ニュー・サウス』に発表した調査報告「南部図書館と人種」³⁷⁾は、南部会議（Southern Council）が公立図書館長172名に送付した回答を分析したものである。調査結果では南部の中央館で黒人に白人と同等のサービスを提供している図書館は59館になっていた。もっともこの59館のなかでも、黒人の子どもにはサービスをしていない館があったりした。また深南部のジョージア、サウスカロライナ、アラバマ、ミシシッピー、ルイジアナでは、中央館で白人と黒人が同等のサービスを受けている図書館はなかった。この論文と同じ号に掲載されたアトランタ大学の図書館長L.レディック（L.D. Reddick）の論考「南部黒人はどこで本を読むことができるのか」³⁸⁾は、現状分析とともに隔離自体の問題点を明確に提示した。レディックのような明確な隔離撤廃を当時の図書館員や図書館学研究者は提示しておらず、この論文は重要な文献になる。しかしながら、こうした文献が図書館界で大きく取り上げられるとか、いっそう声高な隔離撤廃の主張につながっていくことはなかった。

1955年に『ライブラリー・ジャーナル』に掲載されたドロシー・マカリスト（Dorothy McAllister）論文はミシシッピー州に限定した調査報告³⁹⁾で、公立図書館50のうち、黒人へのサービスをしているのは12館にすぎないと実情を報告した。同州での黒人へのサービスに関して、財政支援が不十分、図書館利用が低調、専門的訓練を受けた職員の不在を指摘している。

南部の図書館指導者メアリー・E.アンダーズ（Mary E. Anders）は1958年にコロンビア大学で博士論文「南東部の公立図書館サービスの発展」⁴⁰⁾を執筆した。この論文は19世紀末から20世紀前半の図書館サービスを中心に描いており、南部公立図書館の全体的理解に役立つ。公立図書館の発展を支えた女性クラブをはじめとする多くの図書館関係団体、図書館員養成教育、カーネギーやローゼンワルドといった財団の役割、雇用促進局（WPA）やテネシー流域公社（TVA）といった連邦のプログラム、および州の支援などを要領よくまとめている。第13章の結論の部分では、人種問題があらゆる側面に影響していると指摘し、もともと少ない資源を公共サービスで二重の制度を作ることにより、資源をいっそう散逸させていると述べた⁴¹⁾。しかしそれ以上の言及はなく、また公立図書館サービスと黒人についての分析もなかった。

以上のように南部全体および黒人図書館サービスに関する主要文献を示してきたが、特に留意すべきは1954年のブラウン判決後に図書館界がまったく黒人利用についての発言や基礎的調査をしなかったことである。時機を得たホールデン論文は『ニューサウス』という雑誌に掲載された南部会議の調査であった。1960年12月にエリック・ムーン（Eric Moon）は隔離の問題を「沈黙の課題」⁴²⁾と述べていたが、事実としてそうであった。特にアメリカ図書館協会の場合、黒人問題を地方の問題として封じ込めており、この点については本章の文献上でも確認できたと思われる。

2章 公立図書館での隔離撤廃と黒人の主張の時代：1960-1970年代

2.1 隔離撤廃運動と図書館裁判

・法的枠組みと隔離撤廃の動向：合衆国最高裁が「分離すれども平等」の法理を確立した1896年のプレッシー対ファーガソン事件判決、および分離自体を不平等とした1954年のブラウン対教育委員会事件判決が、人種隔離を考える場合の大きな枠になる。なお公立図書館での隔

離撤廃は学校、バス、公営プールなどよりも円滑に進み、深南部を除いてはブラウン事件判決の時点でかなり進展していた。南部の図書館での人種隔離撤廃裁判は1960年頃を頂点とするが、概して大きな問題もなく、撤廃後の混乱もなく進んだ⁴³⁾。

・先駆的な人種隔離撤廃裁判⁴⁴⁾：1939年にヴァージニア州アレクサンドリア (Alexandria) 公立図書館で、白人の図書館に黒人が図書館カードの発行を求めたが拒否され、裁判になった。判決は原告黒人の勝訴であったが、市は人種差別をなくすどころか、黒人専用分館を設けて人種隔離を強固にしてしまった。1944年から1945年にかけて生じたカー対イノック・プラット・フリー・ライブラリー事件 (*Kerr v. Enoch Pratt Free Library*) の場合、黒人カーは同館の養成クラスへの志願が認められず、人種に依拠する差別として提訴した。連邦控裁はカーの訴えを認めた。そのため同館は判決を館の方針として組み込むと決定したが、同時に養成クラス自体を廃止してしまった。たしかに廃止についての図書館幹部の説明には妥当性があるものの、この措置には実態としては人種隔離を維持したいという考えがうかがえた。

・1960年頃を頂点とする人種隔離撤廃裁判：ヴァージニア州のダンヴィル (Danville)⁴⁵⁾、ピーターズバーグ (Petersburg)⁴⁶⁾、それにアラバマ州のモントゴメリー⁴⁷⁾などが代表的事例になる。いずれも原告黒人が中央館で静かな坐り込みを行って逮捕され、裁判に持ち込んだりしたもので、図書館はいずれも敗訴し、隔離を撤廃している。しかし図書館や市側はさまざまな主張や行動をした。例えば公立図書館を白人からなる私的財団に移して図書館を維持しようとしたり (ダンヴィル)、図書館を意識して不法侵入条例を作成したり (ピーターズバーグ)、1人の黒人に図書館カードを出したというだけで人種隔離をしていないと主張したりした (モントゴメリー)。

・中央館での人種隔離撤廃とは：公立図書館での隔離撤廃とは多分に中央館を黒人が使えることを意味するが、1954年のブラウン事件判決以後、そうした意味での隔離が裁判で認められるはずはなかった。しかし中央館が利用できても、さまざまな障壁はあった。例えばテネシー州のメンフィス公立図書館は1960年に人種隔離について提訴され、裁判に入る前に隔離を撤廃したが、洗面所での隔離は維持していた。黒人が洗面所での隔離を憲法違反と提訴し、結果は黒人の勝訴となった⁴⁸⁾。しかしこの裁判でも市や図書館側は、黒人に性病や伝染病が多いといった根拠のない理由を持ち出したのである。また中央館を利用できるようにしても、それは必ずしも差別的でない等しい扱いを意味しない。黒人を黒人用の閲覧室に「隔離」したり、黒人には貸出サービスだけに限定したり、黒人の子どもの利用を拒否したりした。また図書館員については、例えば身分、給料、昇進での差別はもちろん、黒人図書館員は職員会議に出席できず議事録だけが配られるということもあった⁴⁹⁾。

・合衆国最高裁の判断：人種隔離撤廃の最後の裁判であるブラウン対ルイジアナ事件 (*Brown v. State of Louisiana*)⁵⁰⁾は、公立図書館について合衆国最高裁が扱った最初の事件でもあった。1966年に判決が下され、静かな坐り込みを行った原告黒人の訴えが認められた。人種隔離が許されないと最高裁は一致していたが、はたして人種差別があったか否かで意見が分かれば、判決は5対4という僅差になった。

2.2 アメリカ図書館協会と人種隔離：1960年代初頭

・原則の設定：既述の1936年リッチモンド大会での方針の採択は先駆的な例で、のちの図書館界に大きな影響をおよぼす動きは1960年前後に生じる。その一般的な背景としては社会全般における公民権運動への関心の高まりがあり、図書館界では1960年にダンヴィル、ピーターズバーグ、メンフィスなどで隔離撤廃運動や裁判があった。さらに1959年から1960年にかけては、アラバマ州公立図書館サービス部長エミリー・W.リード（Emily W. Reed）の事件があった⁵¹⁾。この事件では白いうさぎと黒いうさぎの結婚を描いた絵本⁵²⁾、それにアメリカ図書館協会の「精選図書一覧」⁵³⁾が問題とされた。リード事件はこれまでの図書館利用についての人種隔離に加えて、資料への検閲という側面を露呈させた。そしてこの資料検閲という領域の場合、アメリカ図書館協会は1939年の「図書館の権利宣言」の採択以後、最も鍛えられてきた分野という事実があった。これらの出来事を意識的に取り上げ、館界の意見を積極的に導いていったのが、『ライブラリー・ジャーナル』のエリック・ムーンや『ウィルソン・ライブラリー・ブルティン』のジョン・ウェイクマン（John Wakeman）といった気鋭の編集者であった⁵⁴⁾。とりわけ重要なのは、1960年12月号の『ライブラリー・ジャーナル』で、そこではライス・エステスが「アメリカ図書館協会は図書館の隔離についてまったく役立たず」、「何もしてこなかった」と断言した⁵⁵⁾。同時にムーンは「沈黙の課題」⁵⁶⁾との論説で、「隔離の問題がいつまで『地方』の問題であり続けるというのか」と責め立てた。こうした図書館関係雑誌上での主張や若い図書館員の動きによって、1961年2月に「図書館の権利宣言」に新しい条項「図書館の利用に関する個人の権利は、その人の人種、宗教、出生国、あるいは政治的な見解のゆえに、拒否されたり制限されることがあってはならない」（第5条：人種統合条項）を追加したのである⁵⁷⁾。この新設第5条によって、アメリカ図書館協会は60年間にわたる基本方針「地方の管轄範囲に侵入しない」を文言の上では捨てたことになる。なお、この新設第5条は単に黒人だけでなく、1960年代後半から出現するアウトリーチ・サービスを思想的に支える柱となっていく。

・原則の適用と制度的制裁：たしかに「図書館の権利宣言」第5条を採択したのだが、これを抽象的文言に留めるのか、あるいは人種差別に具体的措置を講じるのかは、また別の問題であった。確実に変わったのは、「資料」の問題だけでなく「利用」の問題も知的自由委員会の責任範囲に入ったことである。続く1961年7月、知的自由委員会は具体的取り組みとして、(1)州支部や施設会員の隔離問題、(2)図書館資料へのアクセスについての実態調査を提言した⁵⁸⁾。前者については提言当初から議論が沸騰し、激論ののち1年後の1962年6月にアメリカ図書館協会は「個人会員、支部資格、および施設会員に関する声明」⁵⁹⁾を採択した。その結果、黒人会員を認めていないミシシッピーとルイジアナの州図書館協会は支部の資格を失い、アメリカ図書館協会から自発的に撤退した（なおジョージアとアラバマは1つの州に1つの州支部という方針を充足できずに、すでに1956年に撤退していた）。

一方、後者すなわち資料へのアクセスに関する実態調査の結果が、1963年の『公立図書館へのアクセス』⁶⁰⁾である。人種隔離という観点からすれば、アメリカ図書館協会にとって最初にして最後の大きな調査であった。そこでは「直接的な差別」と「間接的な差別」という考えを導入した。この調査の中心は直接的な差別、すなわち南部公立図書館での隔離の実態を解明す

ることにあり、その調査結果は「『直接的差別』は南部16州にみられる」となっていた。と同時に調査結果は、中南部や境界南部ではほぼ隔離撤廃がされていること、およびプール、学校、バスといった公的機関よりも、はるかに公立図書館での隔離撤廃が進んでいることを示していた。ところで「間接的な差別」とは、政府の行為や法によるのではなく、何らかの要因から結果として生じる人種隔離をいう。一般的には居住パターン、人口移動、経済状態から生じ、往々にして政府の方針（この方針は隔離を目的にするものではない）によって強められる。調査結果はこの種の差別は「全国にみられる」と結論していた。換言すれば、『公立図書館へのアクセス』は、南部での制度的差別は終点に向かいつつあるが、実態としての差別は全国にみられると結論したのである。そして公立図書館界は実態的な差別の解消に向けて、1960年代後半からアウトリーチ・サービスを展開していくことになる。

2.3 黒人に関する図書館史研究の業績

1960年代の前半は前の2つの節で示したように黒人の権利の回復を目指す積極的な運動が地方でもアメリカ図書館協会内でも展開された。したがって全国雑誌などにおける黒人の発言は多くみられるが、図書館史研究という観点からすると不毛な時期でもあった。おそらく黒人の図書館指導者を中心に現実への対処に全精力を傾けていたのであろう。この1960年代から1970年代の研究業績を2つのグループにまとめてみた。1つはアトランタ大学図書館学大学院の業績であり、そこには黒人と図書館の歴史を扱う論文がグループとして存在している。いま1つは1960年代以降の図書館における黒人指導者として確固たる位置を占めるE.J.ジョズィーが編纂した業績である。なお1970年代からいわゆる図書館史研究の業績が散見されるようになるが、この種の業績については次節で扱うことにする。

2.3.1 アトランタ大学図書館学大学院の修士論文

黒人大学のアトランタ大学図書館学大学院は1963年まで修士論文を課していた。注で示しているように、そこではかなりの数の論文が黒人と公立図書館サービスの歴史を探っている⁶¹⁾。例えば、バーバラ・M.アドキンズ (Barbara M. Adkins) 「アトランタ公立図書館の黒人サービス史」(1951) から、ローズバッド・H.ティルマン (Rosebud H. Tillman) 「リトルロック公立図書館の黒人サービス史」(1953)、リーバ・P.ホフマン (Rheba P. Hoffman) 「メンフィス公立図書館の黒人サービス史」(1955)、G.S.バーンズ (G.S. Barnes) 「テキサス州ガルヴェストン公立図書館の黒人サービス史」(1957)、ジョン・L.カリー (John L. Curry) 「ジャクソンヴィル公立図書館の黒人サービス史」(1957)、それに1965年のベッシー・R.グレイソン (Bessie R. Grayson) の「モントゴメリー公立図書館の黒人サービス史」まで、いずれも南部を代表する大都市公立図書館での黒人サービスの歴史を扱っている。各論文の題目自体が高度に画一化されているように、各論文をみると章立てなども画一的で、当地の全般的な図書館状況、公立図書館の歴史を描き、続いて黒人への図書館サービスの歴史と現状を客観的に記述している。黒人サービスへの記述も定式化しており、図書館年報の統計や理事会記録をもとにインタビューを加えるという方式である。これらはタイプ打ちの40ページから50ページの論文で、当然とはいえ館界に出回ったとはいえない。

例えば深南部のアラバマ州の場合、モビール公立図書館を扱ったバーディー・T.ジェイムズ (Birdie T. James) の論文 (1961)、ベッセマー公立図書館のエマ・R.フォンヴィル (Emma R. Fonville) 論文 (1962)、モントゴメリー公立図書館のグレイソン論文 (1965) がある。いずれも50頁ほどの論文で、章立てなどは上述のとおり共通している。フォンヴィル論文はベッセマー公立図書館の全体的歴史を略述したのち、第3章で黒人へのサービスを扱い、組織、管理、施設、備品、予算、職員、蔵書、貸出、諸活動に分けて詳しく説明している。とはいえ1962年の論文であっても人種隔離の問題には一切触れられていない。モビールを扱ったジェイムズ論文は、現代的な図書館サービスの構築において、隔離された図書館は害になると主張しているが、積極的に隔離撤廃を主張するにはいたっていない。注に示したすべての修士論文をみると修士論文執筆者は一貫して抑制的で、隔離撤廃を論理的に訴えた論文は皆無であった。とはいうものの、いずれの論文も当地での黒人へのサービスを論文という形で取り上げた最初の論考といえ、そういう意味でも史学史上の意味は大きい。

こうした修士論文グループで3つの論文が異なる主題を扱っている。まずリリアン・T.ライト (Lillian T. Wright) の「開拓者としての図書館員トマス・ファウンテン・ブルー」(1955)である。この論文はルイヴィル公立図書館の初代黒人分館長を長く務めたブルーの一生を綴っている。残る2つの論文は、1953年のルクレティア・J.パーカー (Lucretia J. Parker) の論文「南部13州の公立図書館サービスと人種統合の研究」、および1963年のバーニス・L.ベル (Bernice L. Bell) の「南部13州の公立図書館サービスと統合：1954-1962年」である。この2つの論文はパーカー論文が95頁、ベル論文が133頁と、頁数自体も他の論文と大きく相違している。いずれの論文も大規模な調査にもとづき公立図書館サービスにおける人種隔離の実態を解明している。特に、ベルの調査は大規模で質問用紙⁶²⁾は3部構成で57の質問項目を用意していた。その調査結果によると、1963年秋の時点で290の図書館が黒人に中央館の利用を許していた。ベルは隔離を撤廃した図書館数を先行研究、すなわちエリザ・グリーソンの1941年の研究、1953年のルクレティア・パーカーの研究と比べている⁶³⁾。この点で、ベルの研究はこれまでの幾多の実態調査を総括する結果になっている。また隔離撤廃している290館について、各々「統合した年」、「1954年最高裁判決（ブラウン判決）の影響」、「統合の方が隔離よりも経済効率がよいか」、「黒人が中央館を利用できることが広く知られているか」、「サービスを周知するについて特に黒人への特別な取り組みをしているか」、「黒人著者や黒人に関する蔵書があるか」、「黒人が興味を持つ雑誌を置いているか」、「利用について年齢制限をしているか」、「お話し会に黒人児童の参加を奨励しているか」、「黒人が図書館理事会に入っているか」をまとめて一覧にしている⁶⁴⁾。

ベルの研究の主要部分は南部13州を取り上げ、各州ごとに隔離撤廃の進展具合を具体的に記述した部分（第2章）⁶⁵⁾にある。最も隔離撤廃が進んでいないのは深南部のアラバマ、アーカンソー、ジョージア、ルイジアナ、ミシシッピ、サウスカロライナである。特にアラバマ州の場合、唯一モントゴメリー市だけが、中央館も黒人が自由に利用できた。ベルの修士論文の標題「1954-1962年」は1954年のブラウン判決を意識しているが、ベルはブラウン判決が図書館サービスに直接関係したとは思えないと結論している⁶⁶⁾。

なお既述のようにアトランタ大学の修士論文は広く出回るといことはなかったが、このベルの修士論文だけが例外で、その概要が『ライブラリー・ジャーナル』に掲載されている⁶⁷⁾。

2.3.2 黒人の主張と業績

本章の第2節で述べたように、1960年12月号の『ライブラリー・ジャーナル』でライス・エステスが「アメリカ図書館協会は図書館の隔離についてまったく役立たず」、「何もしてこなかった」と断言した。これが起点となり、アメリカ図書館協会は制度的な隔離撤廃に取り組み、1961年2月に「図書館の権利宣言」に第5条（人種統合条項）を追加した。また1962年6月にアメリカ図書館協会は「個人会員、支部資格、および施設会員に関する声明」を採択した。1963年の『公立図書館へのアクセス』は実態としての差別は全国に広がっているとして、差別の問題を南部の問題に限定することに問題を提起すると同時に、恵まれない人へのアウトリーチ・サービスの道を開く結果になった。この時代は弱者の権利が主張され、それに対応するサービスが求められた時代でもある。

こうした時代状況にあって、E.J.ジョズィーを中心とする指導的な黒人図書館員は多様な活動を特にアメリカ図書館協会を舞台に行った。ジョズィーは1950年にコロンビア大学で歴史学の修士号、1953年にニューヨーク州立大学オールバニ校で図書館学の修士号を獲得する。そののちフィラデルフィア公立図書館、デラウェア州立カレッジ、ジョージア州のサヴァンナ(Savanna) 州立カレッジの図書館を経て、1966年から1986年まではニューヨーク州立図書館につとめ、そののちはピッツバーグ大学の図書館情報学大学院の教員になった。ジョズィーは1964年頃から図書館界で頭角を現し、1969年にはアメリカ図書館協会内にブラック・コーカス(Black Caucus)を設置、1983年にはアメリカ図書館協会会長になっている。公民権活動家、図書館指導者としてのジョズィーはつとに知られているが⁶⁸⁾、そうした活動の一環として、黒人と図書館との関係を歴史的記述も含めて積極的に掘り起こし、編纂、刊行するという方向がみられる。おそらくこうした企てには、黒人図書館員の業績を記録に留め、さらに黒人図書館員のアイデンティティの形成という運動的な側面もあったと思われる。この種の業績を広く出回った単行書に限定して指摘すると以下ようになる⁶⁹⁾。

E.J. ジョズィーは1970年に編書『アメリカでの黒人図書館員』を刊行した⁷⁰⁾。人種差別の解消が思うように進展していないとの全般的な認識の上で、ジョズィーは同書刊行の意図についてアメリカにおける黒人図書館員の役割を検討することにあるとし、具体的には以下を指摘した⁷¹⁾。「黒人図書館員とはだれなのか」、「なぜ図書館を職に選んだのか」、「司書職でどれだけの機会があるのか」、「不利な点はどこにあるのか」、「図書館界で達成した業績は何か」、「黒人図書館員は将来をどうみているのか」。このように同書は、黒人図書館員としてのアイデンティティの形成、黒人図書館員の業績の確認、および若い優秀な黒人図書館員のリクルートなどに重点があった。そして寄稿した25人の黒人指導者は、おのずと自己の人生を伝記的に振り返り、昔の差別の実態を記し、それにたいする己の闘いを述べ、今後の方向や期待を述べたのである。そうした意味で、すべての寄稿者が大きくは図書館の歴史、小さくは自分が関わった図書館関係事項についての歴史を振り返っている。しかしながら執筆者はいずれも図書館史研究として執筆したのではなく、あくまで自分の経験を語るという意識で執筆している。ほとん

どの論文は歴史研究に欠かせない典拠も注も記してはいないが、当時の黒人指導者の経験と考えを知るには必須の業績になっている。すなわち歴史の事実の解釈に際して、本書は多くの示唆を与えてくれるということである。

続く1972年の編書『黒人図書館員の発言』も『アメリカでの黒人図書館員』と同じような意図を有する⁷²⁾。編者E.J.ジョズィーは「歴史書と同じように、黒人の思想や貢献は無視されてきた」⁷³⁾と述べている。実際、黒人図書館員が社会をどのように把握し、特に図書館をどのように考えてきたかについては、ほとんど記録がない。他の専門職でも同じだが、黒人図書館員は見えない (invisible)。図書館界でも黒人は重要な地位にいないし、意見を求められることも少ない。こうした問題意識から、ジョズィーは27名の指導的な黒人図書館員に意見の表明を求め、黒人の考えを広く流布しようとした。したがって『アメリカでの黒人図書館員』と同じように、研究論文の論集ではないが、一方では前書に比べて自伝的記述や歴史的記述が少ない。各執筆者の論文は全体として黒人と図書館を研究する場合の全領域を包含しており、そうした点で図書館史研究の前提として読むべき本といえる。

ところで黒人大学のノースカロライナ・セントラル大学は、1976年に図書館学校開設35周年を迎えた。また1975年には念願のアメリカ図書館協会の認定校になった。それを記念して開かれた会議の論集が『南東部の黒人図書館員：回想、活動、課題』⁷⁴⁾である。南東部の9州の図書館状況が歴史も含めて略述され、図書館関係団体、黒人学校図書館員、黒人公立図書館員、黒人図書館学教員、黒人専門図書館員など多様な主題について要領よくまとめられている。編者アネット・L.フィナッズィ (Annette L. Phinazee) は、各執筆者には2つの障害があったという。1つは図書館史、各館の歴史を記した文献に黒人がほとんど記載されていないことであり、いま1つは施設の閉鎖、移管に際して以前の記録がほとんど保存されていないことである。特に隔離撤廃の過程で多くの資料が消滅したという。同書は副題が示すように歴史、現状、課題を示すものではあるが、この編者の言が象徴しているように、研究という側面がかなり表面にでてきている。そうした点で1970年のジョズィーの編書とは相違がみられる。

1977年になってジョズィーは2つの編書を世に問うた。1つはケネス・E.ピープルズ (Kenneth E. Peeples) との共編書『司書職へのマイノリティの機会』⁷⁵⁾である。1960年代後半から1970年代にかけて、黒人は独自の活動を続けると同時に、マイノリティのなかの1つのグループという位置づけもされていく。現実に図書館サービスを実施するに際して、図書館員は圧倒的に白人中産階級であり、マイノリティの図書館員が非常に少なかった。マイノリティへの的確な図書館サービスを求めて、各マイノリティ・グループは図書館員養成の段階での取り組みを強め、奨学金などを用意したりすることになる。『司書職へのマイノリティの機会』は、司書職を目指そうとしているマイノリティの学生を特に意図している。同書が扱ったのは、原住アメリカ人、チカノ、黒人、プエルトリカン、アジア系である。黒人を取り上げた第3部⁷⁶⁾では、館種別に仕事の内容、必要な資格や能力、雇用条件などを簡略にまとめ、司書職を目指すように奨励している。本章では詳しく指摘はしないものの、この時代からアウトリーチ・サービスや図書館政策など多様な主題の本のなかで、各論として黒人を扱う論考が多くなってくる⁷⁷⁾。

最後にジョズィーとアン・ショックリーが編纂し1977年に刊行された『黒人図書館・図書館学ハンドブック』⁷⁸⁾である。同書は400頁に近く、黒人と図書館にまつわるあらゆる情報を組み込んだ参考図書と考えてよい。大きく「開拓者と歴史的出来事」、「初期の図書館関係団体」、「現在の図書館・図書館学」、「黒人図書館・図書館学にとって重要な問題」、「黒人蔵書のための欠かせない図書と定期刊行物」、「アフリカ関係資源」、「アフリカ系アメリカ人関係資源」が計37章にわたって記述され、さらに黒人大学での図書館学部、黒人大学での図書館学大学院、黒人多数のコミュニティに奉仕する公立図書館システム、黒人大学図書館、黒人所有の書店に関する精選一覧、黒人図書出版社などが簡単な説明をつけて一覧になっている。当時は常に参照すべき参考図書と位置づけられていたのだろうが、現在では黒人と図書館を歴史的に検討する場合にまず参照すべき基本図書といえるだろう。

3章 黒人と図書館史研究：1970年代以降

3.1 全体的な研究の状況

ヴァージニア・L.ジョーンズ (Virginia Lacy Jones) は1962年の論文で、「アメリカ図書館史で看過されている1つの側面は、公立図書館サービスを獲得するための南部黒人の闘いである」⁷⁹⁾と記している。また1989年にドナレイ・マッケン (Donnarae MacCann) は、「アメリカ黒人への図書館サービスはヨーロッパからの移民への図書館活動ほどにも明らかになっていない」⁸⁰⁾と書いた。さらに約10年を経過した1998年、クラウス・マスマン (Klaus Musmann) は論文「図書館業務の醜い面」で1900年から1950年にいたる図書館サービスと隔離の問題を扱っている。その冒頭、「図書館での隔離という主題を包括的 (comprehensive)、組織的 (systematic) に扱った業績はほとんどない」⁸¹⁾と研究の状況を説明した。

マスマンは「包括的」、「組織的」な業績は非常に少ないと述べていた。いま「包括的」という語を一定の地理的な広がり (例えば深南部、南部) と一定の時間的な広がり (例えば20世紀前半) ととらえてみる。そして「組織的」という語を、1冊の単行書における体系的、系統的な記述と考えてみる。これらの要因を満たす研究業績は第1章第3節で扱った業績、すなわちシカゴ大学に博士号請求論文として提出され、1941年にシカゴ大学出版局から刊行されたエリザ・グリーンソンの『南部の黒人と公立図書館』⁸²⁾しかない。グリーンソンの業績からすでに半世紀以上を経過している。黒人と図書館に関する比較的最近の業績は、例えば1998年にジョン・M. タッカー (John M. Tucker) を編者に刊行された『語られない物語：公民権、図書館、黒人』⁸³⁾である。マスマンは「包括的」、「組織的」を指摘したのだが、マスマン論文を掲載した『語られない物語』自体が個別論文の寄せ集めで、グリーンソンの業績よりも資料の発掘、方法などの点では深化しているものの、「包括性」と「組織性」は欠いていると考えざるを得ない。と同時に「語られない物語」(Untold Stories) という表題自体が、この領域での研究が未開拓で散発的なことを示している。

ところで『語られない物語』で文献展望を担当したのは、図書館史の書誌作成で有名なエドワード・A.ゴデケン (Edward A. Goedeken) で、1954年のブラウン事件判決以降を対象に12ページにわたって「公民権、図書館、黒人図書館学」⁸⁴⁾をまとめている。項目としては「全般

的歴史」、「ブラウン事件判決」、「M.キングと公民権運動」、「黒人と図書館の歴史：資料源」、「アメリカ黒人と図書館の歴史：個別研究業績」、「E.ジョズィー」、「アメリカ黒人と図書文化の歴史」、「高等教育とアメリカ黒人」、「図書館学教育とアメリカ黒人」、「今後の研究」となっている。本章に特に関係するのは「アメリカ黒人と図書館の歴史：個別研究業績」である。ここではまず「黒人と図書館についての広範な研究は非常に少ない」⁸⁵⁾としつつ、発表されている雑誌論文の質は高いと総括した。そして最良の業績としてローズマリー・R.ドゥモント (Rosemary R. DuMont) が1986年に発表した「アメリカ図書館界と人種」⁸⁶⁾をあげ、アメリカ図書館協会が黒人を受け入れていく過程を見事に描いていると絶賛したのである。いま1つ指摘したのはA.P.マーシャル (A.P. Marshall) が1976年に発表した「アメリカ黒人へのサービス」⁸⁷⁾である。この論文はドゥモントが20世紀を扱っているのにたいして南北戦争後から概観している。この両論文に加えてE.J.ジョズィーが1994年に発表した「図書館史における黒人問題」⁸⁸⁾、ジョズィーとキャスパー・ジョーダンによる1977年の「黒人図書館学年表」⁸⁹⁾を指摘した。またゴデケン例えば1960年代の全般的な図書館状況の理解にはエリック・ムーンが1993年に刊行した『学ぶ意欲』⁹⁰⁾がすぐれているとし、そののちは回想、伝記といった業績に移っていった。

ゴデケンの文献展望は黒人と公立図書館に関する研究の現状を端的に物語っている。例えばジョズィーの1994年論文「図書館史における黒人問題」は、図書館史の事典の1項目として書かれたもので、概説とジョズィー自身の回想が組み合わされ、研究論文といえるものではない。またジョズィーとジョーダンの「黒人図書館学年表」は字義通り年表であり、ゴデケンが取り上げた理由が理解できない。またムーンの著作『学ぶ意欲』は『ライブラリー・ジャーナル』編集長ムーンが1960年代に執筆した論説やエッセイの合集で、研究書ではない。これらはゴデケンの参考文献作成に欠点があるというよりも、むしろ黒人図書館史研究の遅滞を明示している。

同時に1990年代後半に入って、黒人と公立図書館での人種隔離を直接的に扱う2つの博士論文が執筆された。1つはシャール・K.マローン (Cheryl K. Malone) がテキサス大学に提出した「アクセスの調停：『黒人』用カーネギー図書館、1905-1925年」⁹¹⁾であり、いま1つはパターンソン・T.グラハム (Patterson T. Graham) がアラバマ大学に提出し後に刊行された「アラバマ州の公立図書館での隔離と公民権、1918-1965年」⁹²⁾である。マローン論文は、ルイヴィル、ヒューストン、ナッシュヴィル、ニューヨークでの黒人分館や黒人サービスを探った業績で、グラハム論文はアラバマ州に限定して、黒人への公立図書館サービスを1918年から1965年まで扱っている。こうした業績も含めて、図書館史研究の質はたしかに向上してきているが、研究の状況は依然として端緒的なことに変わりはない。

3.2 個別研究1：人種隔離を中心とした包括的な文献

本節では黒人と公立図書館の歴史について人種隔離を正面から取り上げた文献、かつ時間的、空間的に比較的広範囲にわたる文献を取り上げる。1976年はアメリカ図書館協会の100年祭に相当し、過去を振り返るにふさわしい年であった。シドニー・L.ジャクソン (Sidney L.

Jackson) の編書『1世紀にわたるサービス：アメリカとカナダの図書館』も図書館界の100年を振り返る企画であった。同書でA.P.マーシャルが「黒人へのサービス」⁹³⁾を執筆し、アメリカにおける黒人への図書館サービスの100年を記している。マーシャルは北部の黒人も視野に入れ、また大学図書館や学校図書館も含めているが、ここでは南部の公立図書館に限定してまとめる。マーシャルは1876年から1900年、1900年から1925年、1925年から1950年、そして1950年から1975年と時代区分を行い、各時代の特徴を示した。

1876年から1900年は教育への関心が芽生え、また図書の流通も増え、識字率も上昇してくるが、一方では黒人に図書は不要という考えも強固で次期への準備期にあたる。

1900年から1925年に南部公立図書館で黒人サービスが開始されるが、これにはカーネギーの寄付も貢献している。マーシャルはルイヴィル、シャーロットをはじめとする図書館活動に言及し、さらに州などが行う巡回文庫にも触れた。またアメリカ図書館協会での黒人サービス・ラウンドテーブルの活動およびハンプトン・インスティテュートでの黒人図書館員養成の開始を取り上げて、この時期を終えている。

続く1925年から1950年の部分では、まず1930年に黒人の識字率が83.7パーセントに達したと指摘し、続いて1930年のルイス・ショアーズの調査および1941年のエリザ・グリーンソンの業績を紹介した。そののち巡回文庫や拡張サービスに触れ、最後に1939年にヴァージニア州アレクサンドリア (Alexandria) 公立図書館で生じた黒人の座り込み事件を紹介している。また全国黒人向上協会は大学教育での平等を求めて法廷闘争を強め、さらに第2次世界大戦はそれまで閉じられていた教育への道を黒人に広げることになった。そして1950年頃になると未曾有の進展をみせる次の時期の兆候が生じていたとまとめている。

最後の1950年から1975年では、まず早期に人種統合を実施したルイヴィル公立図書館を指摘しつつ、一方では1955年のドロシー・マカリスターの調査を援用し、特に深南部では統合は進んでいないとした。そののちアメリカ図書館協会の『公立図書館へのアクセス』(1963) にスペースをあて、間接的差別に注目した。続いてダンヴィルやメンフィスでの隔離撤廃運動や裁判について述べ、隔離撤廃の類型を4つにまとめている。なお『公立図書館へのアクセス』については、公立図書館の人種隔離の撤廃に貢献するとともに、貧者、高齢者、マイノリティ、障害者、外国生まれの人へのサービス、すなわちアウトリーチ・サービスにつながっていったとの判断を示している。

マーシャル論文は以下のように評価できる。既述のように1941年のグリーンソンの『南部の黒人と公立図書館』は現在でもこの分野で最も包括的な研究書としての位置を保っている。しかしグリーンソンの研究は図書館史の研究ではなく、図書館の法的側面や統治面、それに具体的な管理運営面やサービス面での研究を柱にしている。この点を考慮すると、マーシャル論文は図書館史研究として黒人と公立図書館の関係を100年間にわたって素描し、時代区分を導入した点で図書館史研究の出発点と位置づけることができる。マーシャル自身が歴史研究として執筆し、2次文献ではあるが丁寧に典拠をつけている。そして論文執筆の基本的な視点は明確に人種隔離や差別におかれている。それは『公立図書館へのアクセス』を重視し、そこからアウトリーチ・サービスへの展開を指摘して、論文を閉じていることから理解できる。もちろん同

論文にも欠点はある。1930年代からの雇用促進局（WPA）やテネシー流域公社（TVA）のプログラムに言及がないこと、図書館サービス法などに触れていないこと、それに時代区分についての具体的説明がないことである。人種隔離や黒人差別を基本的視座にしていると思えるのだが、そうした視座と対象とする文献および時代区分との関係を説明しておらず、研究論文としてみると大きな欠陥がある。それでも南部公立図書館と黒人の関係を通史として骨格を描いたことは評価に値する。

このようないわば一般図式を描いた業績はいたって少ない。定評のある論文はローズマリー・R.ドゥモントが1986年の『ジャーナル・オブ・ライブラリー・ヒストリー』に発表した「アメリカ図書館界と人種：司書職の態度」⁹⁴である。この論文は、まず20世紀初頭に開始された公立図書館での黒人サービスに触れ、1913年のヤスト論文、ルイヴィルからハンプトンにいたる黒人図書館員養成、および1930年代のカーネギー・コーポレーション、ローゼンワルド基金などによる実験的な取り組みを記している。そののち一転して、1936年のアメリカ図書館協会リッチモンド大会での人種問題と協会の対応、1941年のエリザ・グリーンソン『南部の黒人と公立図書館』、1953年のルクレティア・パーカーおよび1954年のアナ・ホールデンの人種隔離に関する実態調査、さらに1954年アメリカ図書館協会年次大会での1つの州に1つの支部しか認めないという方針から1962年の「個人会員、支部資格、および施設会員に関する声明」にいたる過程を示している。最後に1960年のライス・エステスやエリック・ムーンの主張、1961年の「図書館の権利宣言」第5条（人種統合条項）の追加、さらに1963年の『公立図書館へのアクセス』をめぐる白熱した論争などを記した。

ドゥモントによると、アメリカ図書館協会は外部の圧力があってはじめて人種統合に向けて動いたのである。ドゥモント論文はマーシャルの論文に比べると公立図書館に的を絞り、制度的な人種隔離撤廃へのプロセスを重要事項を選んで記述している点で一貫性がある。また一定の原資料も活用している点で、歴史研究としてはマーシャル論文よりも深みを感じられる。何よりも研究の土台とすべき一連の重要事項を系統的に提示した点が評価されよう。

1996年にスティーブン・クレスウェル（Stephen Cresswell）は「南部図書館における人種隔離の終焉」⁹⁵を発表した。この論文は1955年のドロシー・マカリストーによるミシシッピ州の図書館での隔離実態調査から出発している点に特徴がある。すなわち上述のドゥモントや後述のマスマンはいずれも20世紀初頭の黒人サービスの開始時から筆を進めているが、クレスウェルは隔離撤廃運動から出発している。そこではダンヴィル、ピーターズバーグ、メンフィス、グリーンヴィル（Greenville）、アラバマ州アニストン（Anniston）などでの隔離撤廃運動を記し、1964年末には図書館への抗議運動は終結したと結んでいる。続いて公立図書館への座り込みをめぐる裁判事件（ダンヴィル、モントゴメリーなど）を紹介し、1966年のブラウン対リジアナ事件の合衆国最高裁判決にいたる。そののちアメリカ図書館協会の対応を検討し、1936年リッチモンド大会、1961年の「図書館の権利宣言」第5条（人種統合条項）、さらに1963年の『公立図書館へのアクセス』と展開していく。最後に1964年のフリーダム図書館の実践を簡単に紹介し、その後は北部や西部の黒人へのサービスに図書館界の関心が移行したと結んでいる。

この論文の特徴は公民権時代を出発点に1960年代末までを研究の範囲にした点にある。歴史研究という点では資料の発掘面で物足りないが、いわゆるアウトリーチ・サービスへの展開という語句で閉じるのではなく、1964年以降の黒人運動と図書館にも触れており、この側面はさらに研究が望まれる。

1998年にジョン・M.タッカーを編者に刊行された『語られない物語：公民権、図書館、黒人』で、クラウス・マスマンは「図書館業務の醜い面」⁹⁶⁾を執筆した。この論文は1900年から1950年、すなわち「分離すれども平等」の時代を取り上げて、黒人への図書館サービスを隔離問題を軸に展望している。マスマンによると、図書館界は社会の支配的価値を反映し、図書館団体は黒人へのサービスをためらっていた。まず20世紀初頭からの黒人への図書館サービスを指摘し、1913年のウィリアム・ヤストの論文、1920年代初頭の黒人サービス・ラウンドテーブルの結成と崩壊、黒人図書館員の養成、1930年のルイス・ショアーズの調査、1936年のアメリカ図書館協会リッチモンド大会での黒人差別問題を取り上げ、そののち1940年代については目立つ事柄はないとした。

このマスマン論文は要領よくまとめられてはいるが、1986年にドゥモントが発表した「アメリカ図書館界と人種」と比較すると、資料、方法、視点などの点で先行研究を乗り越えているとはみなしがたい。

2006年に『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』に発表されたマイケル・フルツ(Michael Fultz)の論文も人種隔離時代の黒人への公立図書館サービスを扱っている⁹⁷⁾。フルツは教育史の研究者で特に教育史研究から既存の図書館史研究を検討するという結果になっている。同論文は大きく「初期の時代」と「隔離撤廃」に分け、前者では公立図書館設置は学校よりも約30年遅れて出発すると指摘した。また黒人への図書館サービスについては、成立期以後の研究がなされていないと問題提起を行い、その場合に黒人向けの図書館サービスの進展は遅いものの、黒人カレッジや黒人ハイスクールの多くが黒人一般に図書館利用を認めていたこと、およびローゼンワルド基金などの活動に注目するように求めた。「隔離撤廃」の部分では、まずアメリカ図書館協会などは隔離撤廃に消極的であったが、それは公教育でも同じであると指摘した。またフルツは1954年のアナ・ホールデンの論文、および1963年の『公立図書館へのアクセス』を取り上げ、そこでは公教育とちがって、かなりの地域で隔離が撤廃されていると確認した。公教育の場合は非常に厳しい闘いになるのだが、概して公立図書館の隔離撤廃は早期の時代から、おだやかに進んでいった点に注目している。ところで1916年の時点で南部の黒人ハイスクールは64、黒人用公立図書館は14か15であった。それが1930年代初頭には前者が1,300以上、後者が75程度になっている。すなわち1916年の比率は4：1で、1930年代初頭には17：1である。フルツはこの比率を取り上げて、15年間で大差がついた理由を探るのは興味深いと提言した。

3.3 個別研究2：黒人図書館史研究に限定した単行書など

本節では黒人図書館史研究に限定した単行本や博士論文から精選して取り上げる。アニー・L.マクフィーターズ(Annie L. McPheeters)は1988年に『白人と黒人への図書館サービス』

を著し、1921年から1980年までの図書館サービスを回想した⁹⁸⁾。著者はハンプトンの図書館学校を1933年に卒業し、1934年から30年以上にわたってアトランタ公立図書館の黒人分館につとめ、1966年からはジョージア州立大学で最初の黒人教員になった。本書の目的は、黒人への公立図書館サービスについて長期の闘いを知らせることにある⁹⁹⁾。

『白人と黒人への図書館サービス』は1900年から1959年までの南部黒人への公立図書館サービスを概観したのち、第2章でアトランタの黒人分館（1921-1959）の活動を扱っている。そこでは黒人分館設置をめぐる20年間の遅滞と経過を示したのち、1921年にオーバーン（Auburn）黒人分館が開館するものの、利用は沈滞していたとする。1934年以後、マクフィーターズは積極的な活動で利用を増大させる。それは青少年への多様なプログラムの展開、成人教育プログラムの提供や小企業への相談業務の開始、さらには視覚障害者へのサービスなどによる。同時に黒人の歴史に関する蔵書の構築や書誌の作成にも尽力している。このオーバーン分館は1953年に施設の老朽化を理由に閉鎖される。続く第3章は1950年当時に3つ存在した黒人分館を統率するために黒人部門が設置され、その長になったことから始まる。そして展示、集会活動、青少年へのサービスの重視を記していく。またマクフィーターズは1951年に図書館友の会を組織したが、この市民グループはオーバーン分館の閉鎖に反対するとともに、人種隔離撤廃の問題を始めて公の議論にのせたのである。続く第4章と第5章はアトランタ公立図書館での隔離撤廃を扱っている。特に第5章では1959年の隔離撤廃の決定にまつわる過程だけでなく、中央館職員や図書館理事の構成での人種隔離撤廃まで踏み込んで記述する。なお第6章から第9章はマクフィーターズの生涯を職との関連で回想風に記録している。

本書は黒人分館の責任者としての苦境を率直に描いている。重要な事柄には原資料をそのまま転載しており、こうした原資料は有益である。研究書にありがちな客観的な事実の積み上げという方式はとっておらず、それが本書の長所でも短所でもある。1つの黒人分館の歴史という単館史ではあるが、その記述は広く南部の図書館界にあてはまる。

次に1996年にシャルル・K.マローンがテキサス大学に提出した博士論文「アクセスの調停：『黒人』用カーネギー図書館、1905-1925年」¹⁰⁰⁾である。マローン論文は、ルイヴィル（1905年開館）、ヒューストン（1913）、ナッシュヴィル（1916）の黒人分館、およびニューヨーク・パブリック・ライブラリー135番街分館を取り上げている。なお1925年というのはハンプトン・インスティテュートに図書館学校が開かれた年である。第1章で問題の設定や文献調査をしたのち、第2章でルイヴィル、第3章でヒューストン、第4章でナッシュヴィル、第5章でニューヨークを取り上げた。

マローンによると、ルイヴィルの2つの黒人分館は黒人の読書や知識への要求を具体的に示したのものとして、また黒人図書館での黒人に限定しての雇用は新しい雇用の機会を提供したのものとして重要である。しかし一方では、隔離主義者の思想と実践を南部全域に広めることにもなったと指摘している。続いてヒューストンの場合、黒人はヒューストン公立図書館を利用できず、黒人指導者は1909年にハイスクールを利用して独自の公共の図書館を組織した。そのうち黒人指導者ブッカー・T.ワシントン（Booker T. Washington）の助力もあり、カーネギーの寄付を獲得する。このカーネギー黒人図書館は1913年に開館したが、黒人理事会が図書館を

統治する独立型（シャーロット型）の図書館であった。しかし市は1921年に黒人理事会を解散し、ヒューストン公立図書館の1つの分館にしてしまった（ルイヴィル型への移行）。しかしカーネギー黒人図書館の時代、黒人は自分たちでは左右できないシステムの枠内で、独立した図書館として自律性を発揮し、白人への抵抗と白人との調停を行ったのである。ナッシュヴィルの黒人分館については蔵書構成と利用に触れ、古典、フィクション、児童書、黒人関係資料を含むすぐれた蔵書で、利用者は季節労働者から教員や牧師まで多様であったと分析している。しかしルイヴィルの多様で積極的な活動にはおよばず、またヒューストンほどの自律性もなかったのである。

マロンの結論は次のようにまとめることができる。黒人分館は人種隔離の舞台（学校、交通機関、レストラン、映画館など）をさらに加えることになり、人種隔離をいっそう確固たるものにした。しかし一方では、それまで南部黒人には存在しなかった公共スペースを加えたことも事実である。黒人分館は矛盾した存在で、例えば身体の拘束と精神の解放、引き上げの機関でもあり抵抗の機関でもあるといった側面を有している。これらは単純な歴史解釈や図書館史解釈では説明できず、いっそう深い研究が必要である。なおマロンは博士論文をもとに、ルイヴィル、ヒューストン、ナッシュヴィルを個別に取り上げて、雑誌に論文を発表している¹⁰¹⁾。

既述のように1998年にジョン・M. タッカーを編者に『語られない物語：公民権、図書館、黒人』¹⁰²⁾が刊行された。この本は「黒人図書館学の遺産」（4論文）、「公民権運動の歴史」（5論文）、「図書館の職員、サービス、蔵書」（6論文）と3部構成で、計15論文からなる。前節で取り上げたクラウド・マスマンの包括的な論文「図書館業務の醜い面」は省き、公立図書館と黒人に焦点を絞った論文を紹介する。

ダン・R. リー（Dan R. Lee）の論文「隔離から統合へ」¹⁰³⁾は、サウスカロライナ州に限定して1923年から1962年までの黒人への図書館サービスを追っている。黒人用図書館設置への抵抗、慈善家や慈善団体それに図書館員の尽力、そして1960年代の学生活動家による図書館活動などを取り上げた。そのことで隔離から統合への道がいかに長く、苦難にみちたものかを明らかにしたのである。またドナルド・G. デイヴィス・ジュニア（Donald G. Davis, Jr.）などの論文「解放のための読書」¹⁰⁴⁾は、1964年にミシシッピ州で展開されたフリーダム夏期プロジェクトを扱っている。これは人種平等会議（Congress of Racial Equality, CORE）、学生非暴力調整会議（Student Nonviolent Coordinating Committee, SNCC）の支援のもと、北部の大学生をボランティアとしてなされたプロジェクトで、投票への登録、フリーダム学校、コミュニティセンターを3つの核にしていた。そうした施設におかれた図書館は投票に関する情報を提供するとともに、教育、娯楽機能も担当したのである。デイヴィスによると、フリーダム図書館は図書にアクセスできない人に図書を提供し、図書や情報への認識を植えつけ、図書館自体が隔離への直接的な攻撃活動であったという。アンドレア・L. ウィリアムズ（Andrea L. Williams）はテキサス州ウィチタフォールズ（Wichita Falls）の黒人分館の成立（1934）から人種隔離撤廃（1962）、それと同館の閉鎖（1968）までを記している¹⁰⁵⁾。また定評ある人物参考図書『アメリカの黒人女性（I、II）』¹⁰⁶⁾の編者ジェシー・C. スミス（Jesse

C. Smith) は「黒人女性、公民権、図書館」を執筆し、オーガスタ・B. ベイカー (Augusta B. Baker)、ヴァージニア・L. ジョーンズなど7名の女性を選んで紹介した¹⁰⁷⁾。なお文献展望を担当したのは図書館史の書誌作成で有名なエドワード・ゴデケンで、1954年のブラウン事件判決以降を対象に12頁にわたって主要文献をまとめており、研究の手助けとなる¹⁰⁸⁾。

2000年にS.J. アッカーマン (S.J. Ackerman) が発表した「サミュエル・ウィルバート・タッカー：学校での人種隔離撤廃運動での世に知られていない英雄」は、学校での人種隔離運動に果たした公民権活動家で弁護士のサミュエル・W. タッカー (Samuel Wilbert Tucker) の生涯を簡略に示したもので、研究論文というよりも読み物である¹⁰⁹⁾。タッカーは1939年3月に黒人の退役軍人に付き添って、ヴァージニア州アレクサンドリア (Alexandria) 公立図書館に退役軍人に図書館カードを出すように図書館を訪問するが、両者は退館させられる。5月には裁判所にカードを出すように訴える。同時に8月には図書館への座り込みを計画する。1名の黒人の若者が図書館に入館し、サービスを求めるが、図書館は拒否する。黒人は退館せず、書架に向かい本を取り出して、静かに閲覧機で読書した。そののち次々と一定の間隔で5名の黒人も同じ行動をとった。最終的には逮捕されたが、裁判では治安紊乱罪に該当するか否かを問題とし、被告は裁判を取り下げた。一方、9月には退役軍人への図書館カードの発行についての判決が出され、図書館利用を白人に限定するとの法規はないとの結論であった。と同時に判決は、黒人用の別途の図書館を提供しない限り、アレクサンドリアの黒人住民は図書館を利用する権利を持つとなっていた。裁判自体はタッカーの勝利であったが、市議会は急ぎ黒人分館を設置することになり、人種隔離撤廃どころか、人種隔離を強化してしまった。

パターソン・T. グラハムがアラバマ大学に提出した博士論文「アラバマ州の公立図書館での隔離と公民権、1918-1965年」は、2002年に『読む権利：アラバマ州の公立図書館での隔離と公民権、1918-1965年』として出版された¹¹⁰⁾。内容に変化はないが、章立てなどに若干の変化がある。グラハムは単なる動きの実証的記述のみならず、そうした個別実証的研究を基礎にして時代区分にまで止揚した。同書は、第1章「黒人図書館と白人の態度、初期の時代：バーミングハムとモビール、1918-1931年」、第2章「黒人図書館と白人の態度Ⅱ：大恐慌の時代」、第3章「アフリカ系アメリカ人のコミュニティと黒人公立図書館運動、1941-1954年」、第4章「座り込み (Read-In) 運動：アラバマ州公立図書館での隔離撤廃、1960-1963年」、第5章「図書館員と公民権運動：1955-1965年」で構成されている。

1918-1931年は白人の恩恵による黒人分館の設置時代であり、大恐慌 (1930年代) の時代では雇用促進局 (WPA) やテネシー流域公社 (TVA) による図書館活動を取り上げている。こうした連邦の図書館プログラムについて、グラハムは連邦職員が地元の慣習にしたがったため、プログラムに黒人への図書館サービスが含まれないことが多かったと把握している。なお1930年代も白人の恩恵による劣悪なサービスに変わりはない。第3章の1941年から1954年は、黒人コミュニティが牧師、教育家、企業主、市民活動家、図書館員に率いられて、図書館サービスを求める時代である。そして第4章は隔離撤廃の経過を、モビール (1961年隔離撤廃)、モントゴメリー (1962)、ハンツヴィル (Huntsville, 1962)、バーミングハム (1963)、アニストン (1963) を取り上げて記した。最後の第5章「図書館員と公民権運動」では、まずモントゴメリー

のバスボイコット事件に関わった図書館員ジュリエット・H.モーガン (Juliette H. Morgan)、白黒のうさぎの結婚を描く絵本を発端とする事件の中心人物であるアラバマ州公立図書館サービス部長エミリー・W.リード、セルマ (Selma) 公立図書館員パトリア・ブラロック (Patricia Blalock) を紹介した。セルマの場合は白人館長ブラロックの指導下で、1963年に新聞への広報も黒人に知らすこともなく、自発的に人種隔離撤廃を実現したのである。さらにこの時期のアメリカ図書館協会およびアラバマ州図書館協会の動きもまとめている。そしてグラハムは、本研究がアメリカでの人種の平等、表現の自由、知的自由と密接に結びついていることを確認したのである。

グラハムが示した時代区分の妥当性はともかく、1つの図式が示されたことは後の研究にとって有益である。同書は第1次文献の渉猟、新聞の活用、インタビューの実施など、最近の図書館史研究のオーソドックスな手法を用いている。これまでマクロな業績はアメリカ図書館協会の方針とか、主要な出来事を比較的浅く扱う場合が多かった。一方、個別実証的な研究はそれ自体意味があるものの、広い展望を示すものは少なかった。グラハムの本書は、この両者の欠点を克服していると思われる。すなわちアラバマ州という1つの州を舞台にしながら、その中で半世紀の図書館史を単に文献というよりも、いわば実態という面から描き出したことに特徴があるといえよう。ただ第4章は1960年から1963年、第5章は1955年から1965年と時代が重複している。前者は公立図書館での隔離撤廃を、後者は3名の図書館員に焦点をあてており、研究書における論述および時代区分の一貫性という観点からすると、物足りない部分がある。

2002年になってR.F.ジョーンズ (Reinette F. Jones) が発表した『ケンタッキー州におけるアフリカ系アメリカ人への図書館サービス』¹¹¹⁾ は、副題 (from the Reconstruction Era to the 1960s) が示すように、南北戦争後の南部再建期から1960代までの黒人への図書館サービスを扱った業績である。第1章に「歴史的概観」、第6章に「影響：1852-1956年」を配置し、実質的には第2章 (1751-1904年)、第3章 (1905-1923年)、第4章 (1925-1935年)、第5章 (1936-1963年) という4つの章を設けている。基本的には年表の方式で、各項目に客観的な説明を加えていくという方式である。例えば「1905年 ルイヴィル西部黒人分館」という項目をみると、記述は成立時の1905年を起点に8ページにわたり、充実した内容になっている。また黒人社会に影響する大きな出来事 (1896年のブレッシー事件判決など)、またケンタッキー州の外の重要な動き (1925年のハンプトン・インスティテュートの設立など)、さらにはアメリカ図書館協会の黒人サービス・ラウンドテーブルや南東部図書館協会の説明など、ケンタッキー州内の図書館 (公立、大学、学校図書館) だけでなく、南部あるいは全国の動きのなかで、ケンタッキーの動きがわるようになっている。記述は客観的で、手軽な読み物、さらに事実を知りたいときの簡便なハンドブックとしても使えるが、典拠はしっかりしており、本文150ページに注が636に達している。各項目の記述は既存の研究書などに頼るだけでなく、ジョーンズ自体のオリジナルな研究も組み込まれており、この種の図書としては良質のものと思われる。

最後に黒人図書館員の養成史に触れておきたい。ベンジャミン・F.スペラー・ジュニア (Benjamin F. Speller, Jr.) を編者に1991年に『黒人図書館員の教育』¹¹²⁾ が発行された。これはノースカロライナ・セントラル大学の図書館情報学大学院の50周年にあたって開かれた会

議の論集である。そこではE.J.ジョズィーの「まえがき」¹¹³⁾が黒人図書館員養成教育について全体的な歴史的展望を与えているが、本書の中心は1990年代以降の黒人図書館員の養成、とりわけ図書館員への勧誘が大きな題目になっている。それは最後に総括を行ったマイルズ・M. ジャクソン (Miles M. Jackson) のまとめ「1988年、アメリカ図書館協会認定校でマイノリティの卒業生は39パーセント減じた。特に黒人は図書館員になりたがらず、黒人図書館員数は激減している」¹¹⁴⁾に現れている。黒人図書館員の養成ではアーサー・C.ガン (Arthur C. Gunn) が1986年にピッツバーグ大学に提出した博士論文「初期の黒人図書館員養成教育」¹¹⁵⁾がある。この論文はハンプトン・インスティテュートの図書館学校の歴史と、アトランタ大学での図書館学校の設立過程を記したもののだが、資料の渉猟が十分とさええず、また視野が狭いと思われる。むしろ1986年にローズマリー・R.ドゥモントが発表した「黒人図書館員の養成教育：歴史的概観」の方が、要点を押さえてコンパクトによくまとめられている¹¹⁶⁾。同論文はレイヴィル公立図書館での養成 (1910-1931)、ハンプトン・インスティテュート (1925-1939)、アトランタ大学 (1941-)、それにノースカロライナ・セントラル・カレッジ、アラバマ・A&M.大学の図書館学校について、客観的な記述を要領よく行っている。ドゥモントは、黒人大学を除いて図書館学校が黒人図書館員の養成に強い責任感を持つことは、ごく最近までなかったとまとめている。また1986年の時点でも1つの図書館学校が50パーセントの黒人卒業生を出しており、これでは人種統合ができていいのか疑問であると指摘した。図書館学校はいっそう積極的な措置を講じ、等しい機会を黒人に提供しなくてはならないのである。

実はハンプトン・インスティテュート図書館学校の成立、内容、閉鎖、それにかわるアトランタ大学での開校については、アメリカ図書館協会の各指導者、図書館学教育委員会、カーネギーなどの財団の意図などが錯綜し、図書館学校を置く大学としても他にタスキーギ、フィスク (Fisk) なども視野に入れられていた。ロバート・S.マーティン (Robert S. Martin) とオルヴィン・L.シフレット (Olvin L. Shiflett) の1996年の論考「ハンプトン、フィスク、アトランタ」¹¹⁷⁾は、黒人図書館員養成機関をめぐる確執を詳細に分析している。南部での黒人図書館員の養成教育は、アメリカ図書館協会にとっても、カーネギーといった財団にとっても、また南部の図書館員にとっても、大きな関心事でありつづけた。マーティン論文は、ハンプトン・インスティテュート、アトランタ大学での図書館学校設置にあたって、大学の適性や財政や施設に加えて、大学の基本的性格や地理的位置、さらに諸々のグループや個人の利害を明らかにし、最終的にアトランタ大学に落ち着くプロセスを豊かな資料を掘り起こして解明している¹¹⁸⁾。

南部での黒人図書館員の養成はもともとレイヴィル公立図書館の黒人図書館員養成クラスが先発 (1910-1931) した。その延長上に、および養成クラスを乗り越える形でハンプトン・インスティテュートでの養成が展開 (1925-1939) し、アトランタ大学 (1941-) などにつながっていく。こうした流れに沿って数少ない研究はなされてきたのだが、アリソン・M.サットン (Allison M. Sutton) が2005年に発表した論文「アフリカ系アメリカ人への初期図書館養成史の空白を埋める」は、学校図書館員の養成という観点から黒人図書館員養成史に、新たな視点を持ち込んでいる¹¹⁹⁾。サットンは1936年から1939年に展開された「黒人司書教諭教育プログ

ラム」(Negro Teacher-Librarian Training Program, NTLTP)を取り上げて、原資料を渉猟した論文にした。1927年に南部大学・学校協会(Southern Association of Colleges and Schools, SACS)は、ハイスクールの学校図書館サービスの基準を1927年に採択し、その実施を1935年秋に設定した。この基準は施設、蔵書、それに司書教諭の養成が3つの柱になっていた。そしてこの基準を意識して、1936年から1939年にかけてハンプトンやアトランタなど4つの大学を拠点に基準が示す12単位を付与する研修が夏期プログラムとして実施された。このプログラムは、アメリカ図書館協会の図書館学教育委員会(Board of Education for Librarianship)、SACS、資金を援助したジェネラル・エデュケーション委員会(General Education Board: もともとは1902年にジョン・D.ロックフェラー(John D. Rockefeller)が教育の促進を目的に設けた組織)、それに南部の図書館学教育界(中心はハンプトンのフローレンス・R.カーティス)の合同事業で、279名の司書教諭を生み出した。この数値はハンプトンが14年間に輩出した図書館員(183名)の数よりも多いという。このプログラムは単に学校図書館界にとどまらず、公立図書館史にも重要な意味を有する。当時、黒人への図書館サービスがない場合が多く、学校図書館(黒人大学の図書館)が一般住民に開かれたり、一般向けの成人教育プログラムを実施していたからである。

3.4 個別研究3:各論

前の2つの節に該当しない南部図書館史と黒人の文献を中心に示しておく。すべて雑誌論文で、2つの節の内容を各論的に深める文献、さらには新しい視点や主題を持ち込んでいる文献を重視している。

1998年に発表されたケイラ・B.バーレット(Kayla B. Barrett)などの論文「アラバマ州図書館協会と人種統合」¹²⁰⁾は、アラバマ州図書館協会に黒人会員を認めるか否かに関わる議論と経過を詳細にまとめたものである。1949年に同協会会長が黒人を会員に認めることを提案し、理事会はその方向にまとめ、全会員への郵送投票でも賛成が反対よりも多かった。しかし論議はもつれ、黒人も参加する検討委員会も設置され検討したが、結局1952年になって委員会はアラバマ州黒人図書館協会という別途の協会の設置を勧告して幕を閉じた。一方、1954年アメリカ図書館協会年次大会は各州に1つの州支部という決定をし、アラバマ州図書館協会はアメリカ図書館協会から脱退するにいたる。本論文は1949年から1952年までの経緯を詳細に探った論考であるが、外圧もなしにアラバマ州という地で図書館協会の幹部が会員資格での人種差別撤廃を打ち出していたことは注目に値する。

スティーヴン・R.ハリス(Steven R. Harris)の2003年の論文「公民権とルイジアナ州図書館協会」¹²¹⁾は、上述のバーレット論文と軌を一にする。1946年頃からルイジアナ州図書館協会では副会長が黒人に入会資格を認めるように主張し、検討委員会が設置される。検討委員会は1949年末に黒人の参加を認め、大会を開催できる施設を探すように勧告した。しかし1950年大会で同勧告にたいする採否を1年延期するという動議が出され、この動議が圧倒的多数で採択された。そして最終的には委員会自体が勧告を引き下げてしまった。また1954年のブラウン事件判決後、南部では「大規模な反抗」(massive resistance)の時期があり、ルイジアナ州

図書館協会は例えば1953年に知的自由委員会を設置したがまったく機能しなかった。そのちアメリカ図書館協会では1954年に各州に1つの支部という決定、1961年に「図書館の権利宣言」第5条（人種統合条項）の採択、1962年に「個人会員、支部資格、および施設会員に関する声明」の採択と進んでいく。その結果、ルイジアナ州図書館協会は支部の資格を失い、アメリカ図書館協会から自発的に撤退した。なお1964年公民権法の影響は大きく、翌1965年にルイジアナ州図書館協会はアメリカ図書館協会に支部資格の復活を申し込むことになる。

続いてジョン・L.プレアー（John L. Preer）の2004年の論文はリッチモンドで開かれた1936年アメリカ図書館協会年次大会を扱っている¹²²⁾。この大会では司書のアイデンティティ、拡張サービス、連邦の補助、それにラジオ、映画、マイクロフィルムなどのテクノロジーが大きな柱になった。しかし1936年大会が有名なのはアメリカ図書館協会で人種問題が明確に浮上してきたことによる。そしてアメリカ図書館協会の大会は差別のあるホテルや施設では開催しないという決定、要するに大会における非差別決議を採択したのである。その結果、20年にわたって深南部ではアメリカ図書館協会の大会が開けないことになる。プレアーによると、連邦補助も人種隔離撤廃も同大会から20年を経過して実現する。そうした意味で、プレアーは同大会を1つの出発点と位置づけている。

バーレット、ハリス、プレアーの各論文は、アメリカ図書館協会レベルではこれまで指摘されてきたことを実証面で補強するとともに、州図書館協会内部での動きを豊かな原資料を用いて説明したことに意義がある。

ところで黒人女性は黒人と女性という二重の重荷を背負っている。この点を意識しつつ、ジェイムズ・V.カーマイケル・ジュニア（James V. Carmichael, Jr.）は博士論文¹²³⁾をもとに、高質の研究論文を発表している。1986年の論文「アトランタの女性図書館員」¹²⁴⁾は、19世紀末から20世紀初頭にアトランタの図書館活動を担った女性、およびアトランタ公立図書館に付属する図書館学校の卒業者を詳細に分析した好論文である。女性図書館員は男性図書館員の配下という位置づけ、あるいはディー・ギャリソン（Dee Garrison）などの女性化理論で説明される場合が多かったが、同論文はこの時期のアトランタの図書館は女性が支配していたこと、およびジェンダーによる給与の差は小さかったことを実証している。概して第3世代の修正解釈に反証を示す結果になるとともに、いっそう慎重で精緻な研究の必要性を示す結果になっている。また同論文はこれらの女性が示す黒人にたいする態度にも触れ、当時の一般的な状況と比べると、黒人や黒人への図書館サービスについて非常に進歩的であったと結論している¹²⁵⁾。続いて1992年にカーマイケルは、南部の図書館員養成教育における女性の役割を、形成期（1905-1930）、「発展期」（1930-1945）に分けて分析した¹²⁶⁾。その分析によると、南部での図書館員養成教育はほとんど女性の独壇場であった。また両期を通じて、図書館学教育を形成したのはジェンダー、人種、階級についての南部の態度であり、南部の貧しい経済状況であったとする。さらにアトランタとケンタッキーの地域的対立も組み込まれている。黒人図書館員の養成については、ハンプトン・インスティテュート、アトランタ大学での図書館学校の設置にまつわる確執を取り上げた。

なおステファニー・J.ショー（Stephanie J. Shaw）の1996年の単行書『女性の在り方と行

動』¹²⁷⁾を指摘しておく。本書は人種隔離時代の専門職の黒人女性を取り上げて歴史的考察を行った業績である。そこでは黒人女性が獲得できる4つの最も高度な専門職として、教職、看護職、司書職、それにソーシャル・ワークを指摘し比較検討を行っている。例えばこの4つのグループのなかで、看護師だけが人種隔離の時代に全国的な団体を発展させ維持できたとしている。図書館については、黒人女性に限らないが、アメリカ図書館協会内に1969年にブラック・コーカスができてはじめて全国的な組織ができたことと記している¹²⁸⁾。図書館や黒人女性図書館員についての記述は散発的であるが¹²⁹⁾、職としての司書職が黒人女性にとってどのようなものであったのかを理解できる。

メアリー・L.バンディ (Mary L. Bundy) とフレデリック・スティロー (Frederick Stielow) を編者として、1987年に刊行された『アメリカ図書館界と積極的活動主義』¹³⁰⁾が扱った時代は1962年から1973年までで、公民権の時代であり、またアウトリーチ・サービスの時代である。本書は当時に図書館での改革を求めて活動した人が、約20年後に自分の活動を振り返ったものである。おそらく自分たちの活動の正当性を確認するという私的な願いもあったろうが、それ以上に図書館サービスで基本にすえるべき姿勢と方向を、若い図書館員に伝えておきたいという意図があったろう。本書で各執筆者が示したサービスは、経済不況と社会の保守化とともに縮小、消滅していった。そうした意味で、本書が示す問題意識はむしろ重要性を高めていると思われる。E.J.ジョズィーの第1章「公民権運動とアメリカ図書館界」¹³¹⁾は1960年代の図書館界をマクロに描き、本書全体の導入部になっている。1960年以前のアメリカ図書館界、とりわけアメリカ図書館協会の姿勢を総括したのち、1960年代前半期の転換を示すとともに、「私たちはアメリカ人の生活におけるすべての面で、差別の重荷や人種の障壁のない機会の平等を求めている」¹³²⁾と指摘し、闘いの継続が必要であると強調した。

同書で黒人に的を絞った論考は2つである。まずウィリアム・カニングム (William Cunningham) はアメリカ図書館協会のブラック・コーカスに絞って執筆し、1969年のコーカスの成立から初期4年間の動きをまとめている¹³³⁾。そこでは設立の経緯、目的、議会図書館での黒人差別への取り組み、図書館協会の評議会や委員会に黒人を参画させる取り組みなどを記している。次に、ヘレン・ウィリアムズ (Helen Williams) は白人図書館学校での黒人の経験を扱っている¹³⁴⁾。1962年から1974年に白人の図書館学校に学んだ黒人にアンケート調査を実施し、その結果を報告した。そこでは教員や学生から受けた差別と、それにたいする黒人学生の対処法がまとめられている。人種差別主義は黒人学生への低い学業期待など、さまざまな面にあらわれていたという。なお同書の付録は1970年にブラック・コーカスが発表した「ブラック・コーカスによる人種隔離 (撤廃) についての決議」などを掲載している¹³⁵⁾。

各論では、ダン・R.リーが1991年の『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』に発表した「フェイス・キャビン図書館」¹³⁶⁾がある。1932年から1960年に展開されたサウスカロライナ州とジョージア州の村落部の黒人を対象にする図書館サービスを解明した論文で、よく調査されている。ウィリー・L.バフィンソン (Willie L. Buffington) が開始したこの図書館は、全国から古本を集め、それをもとに黒人学校に図書室を作り、学校図書館と公立図書館の役割を担わせようとするものであった。30年間に約100の図書館が設置されたが、州はこの活動に冷淡

であったという。この図書館は戦後の図書館サービス法の採択、それに人種隔離の消滅とともに使命を終えた。

パトリック・M.ヴァレンタイン（Patrick M. Valentine）の1996年の論文「鉄鋼、棉、タバコ」¹³⁷⁾は、1900年から1940年におけるノースカロライナを取り上げ、公立図書館への慈善を取り上げている。おのずとその中心はカーネギーの寄付とローゼンワルド基金の実験的プログラムが中心となる。いずれも公立図書館サービスの思想の普及に貢献したが、図書館設置以上の関心が見出されないと結論している。なおノースカロライナはジョージアほどカーネギーの寄付に積極的ではなかったが、その理由としてジョージアでは州図書館委員会や州図書館協会の設置が早く（いずれも1987年）、活発にカーネギーの寄付を自治体に働きかけたためとしている（ノースカロライナではおのおの1909年、1904年）。黒人への図書館サービスについてはシャーロットとグリーンズボロ（Greensboro）でのカーネギーの寄付を取り上げ¹³⁸⁾、ローゼンワルド基金の実験的プログラムについては、概してノースカロライナでは失敗し、失敗によって黒人が最も不利を被ったとした¹³⁹⁾。

ローゼンワルド基金による図書館プログラムについては、図書館における知的自由の歴史研究者として有名なルイズ・S.ロビンズ（Louise S. Robbins）が、2005年にオクラホマ州を対象に、ローゼンワルド基金や雇用促進局（WPA）の実験的な図書館サービス・プログラムについて、原資料を駆使した実証性の高い論文を発表した¹⁴⁰⁾。例えばローゼンワルド基金での図書館プログラムは、(1)小さな文庫（14冊から50冊）の配布（学校などへ）、(2)黒人カレッジの図書館の向上、(3)カウンティ全域へのサービスの提供という側面からなっていた。ロビンズはこうしたプログラムの運営を解明するとともに、図書館サービスへの感謝の手紙、実験プログラム終了後のサービスの持続具合、このプログラムに市場を求めて発行された図書などを取り上げ、ローゼンワルド基金や雇用促進局のプログラムの成果を追求したが、成果を分析し、はっきりと結論を導くのは難しいとしている。

成果という側面を違った視点から検討した論文として、ジュリア・A.ハースバーガー（Julia A. Hersberger）、ロウ・スア（Lou Sua）、アダム・L.マレー（Adam L. Murray）が2006年に発表した「コミュニティの果実と土台：グリーンズボロ・カーネギー黒人図書館、1904-1964年」がある¹⁴¹⁾。この論文は、ノースカロライナ州グリーンズボロ（Greensboro）のカーネギー黒人図書館の歴史を取り上げ、社会科学的な手法を用いて同館がコミュニティでどのような役割を果たしていたのかを解明しようとした。デイヴィッド・W.マクミラン（David W. McMillan）とデイヴィッド・M.チャヴィス（David M. Chavis）の枠組み、すなわちコミュニティを構築する4つの塊りとして、(1)構成員であること、(2)影響、(3)ニーズの統合と達成、(4)共有された感情的結びつきという塊りを分析枠組みとして用いている。具体的には、「カーネギー黒人図書館の設立にアフリカ系アメリカ人コミュニティの果たした役割」、「アフリカ系アメリカ人コミュニティにおいて、『場』としてのカーネギー黒人図書館を位置づかせるために、構成員の果たした役割」、「図書館とコミュニティとの相互の影響」、「コミュニティおよび図書館のニーズの充足方法」、「図書館を高質の『場』の経験として位置づける結びつき、すなわち共有された感情的な結びつき」である。そしてこの最後の「共有された感情的な結び

つき」の解明を最も重視した。図書館という「場」への関心は図書館史研究でも大きな関心になっているのだが、本文献レビューでも示してきたように諸研究業績は圧倒的に制度やサービス提供側の分析が多く、利用者に視座をすえた研究は重要性を増している。

アルマ・ドーソン (Alma Dawson) の2000年の論文「黒人の図書館員と図書館学を祝う」¹⁴²⁾は、重要な文献の紹介、重要な黒人図書館関係者の伝記を掲載している文献の紹介、専門職団体、図書館とサービスの発展、図書館学教育、公民権や差別といった節に分けて、黒人の業績を示している。基本的には人物と文献の紹介と考えてよく、その限りでは要領よくまとめられている。

最後にニューヨーク・パブリック・ライブラリー135番街分館について、最近の業績を指摘しておく。ベティ・L.ジェンキンズ (Betty L. Jenkins) の1990年の論文「ハーレムの白人図書館員」¹⁴³⁾は、ニューヨーク・パブリック・ライブラリー135番街分館、いわゆるハーレム分館で黒人への図書館サービスを開拓したアーネスティン・ローズを扱っている。ローズは1920年から1942年まで同館に尽くし、同館のサービスはモデルとされた。ジェンキンズはローズの活動を紹介し、その評価を行っている。ジェンキンズによると、ローズは黒人関係蔵書の構築、黒人図書館員の雇用と研修、コミュニティの指導者との協力、それに成人教育プログラムを軸にサービスを行った。また図書館が人種、階級などにかかわらず、すべての人に開かれた「社会の知的センター」になることを願っていたという。こうしたローズの姿勢はときに軋轢も生んだが、ジェンキンズはローズの業績を高く評価した。

サラ・A.アンダーソン (Sarah A. Anderson) の2003年の論文「行き場」¹⁴⁴⁾はハーレム・ルネサンス期のニューヨーク・パブリック・ライブラリー135番街分館の活動を記している。ローズの指導下で、同館はハーレム・ルネサンス運動に重要な役割を果たした。図書館は作家と読者を結びつける会合を企画し、芸術家と観覧者を結びつける芸術展を開き、演劇家と観衆が交わる機会を設定した。こうした文化的な活動とともに、黒人蔵書を確実に蓄積し、黒人と黒人の経験を結びつけるのに貢献したのである。さらにローズは図書館職員の人種統合を主張し実現するが、これは当時において例外的なことであった。ローズの活動によって、135番街分館はまさにコミュニティに埋め込まれた存在になっていった。

なおハーレム分館を振り出しにニューヨーク・パブリック・ライブラリーにつとめた黒人図書館員レジナ・アンドリュース (Regina A. Andrews) と、同館管理職との昇進や俸給をめぐる争いについては、2007年のエセリン・E.ホイットマイヤー (Ethelene E. Whitmire) の論文がある¹⁴⁵⁾。

おわりに

1

2008年に刊行されたデイヴィッド・M.バトルズ (David M. Battles) の『南部公立図書館におけるアフリカ系アメリカ人へのサービス』は、南部公立図書館における黒人へのサービスを扱ったのはじめての通史と位置づけられよう¹⁴⁶⁾。本文は146ページで、植民地初期から1966年までを扱っている。1966年というのは合衆国最高裁がブラウン対ルイジアナ事件判決を下した

年である。同書は全部で21章を設けており、各章の末に注がつけられている。各章はまずその時期を代表する出来事を特に黒人問題を中心に一般的な概説を示し、そののち黒人と公立図書館についての記述を展開している。

バトルズによると、南部で公民権を獲得していくアフリカ系アメリカ人の長期にわたる闘争は十分に研究されている。またアメリカ公立図書館史も、完璧とはいえないまでも、十分に研究されている。それらに比べて南部公立図書館への黒人のアクセスをめぐる闘争は、研究が進んでいない。この分野の研究の多くは、断片的な研究（short studies）か特定の州に限定した研究である。こうした問題意識の上に、バトルズは南部全体を対象に公立図書館と黒人の関係を歴史的に検討しようとする。そして、アフリカン・アメリカン研究、南部研究、それに図書館史研究を視野に入れ、その相互関係や影響関係に留意しつつ、南部公立図書館へのアフリカ系アメリカ人のアクセスという問題を扱うとしている。

『南部公立図書館におけるアフリカ系アメリカ人へのサービス』は、公立図書館での黒人サービスへの前史といえる1890年代までに6つの章をあて、公立図書館と黒人サービスについては、最終の第21章「結論」を除くと、14の章をあてている。それらは以下のようになっている。各章で主にとりあげられている事項を整理して示しておいた。

第7章 1900-1910年：隔離された公立図書館の興隆

アトランタ、シャーロット、メンフィス、テキサス州ガルヴェストン（Galveston）、ルイヴィルなどでの黒人サービスの開始、カーネギーの寄付

第8章 1911-1914年：アメリカ図書館協会年次大会

ヤストの1913年報告

第9章 1915-1925年：隔離の強化

第1次世界大戦やカーネギーの寄付の終結により、黒人図書館サービスに資金が回らない。ただしバーミングハムの黒人分館開館（1918）を中心にいくつかの例外がある。

第10章 1921-1925年：新しい黒人運動：アメリカ図書館協会の再試行

黒人サービス・ラウンドテーブル

第11章 1926- 1929年中頃：嵐の前の静けさ

ハンプトンで開かれた第1回黒人図書館会議（Negro Library Conference）、ルイヴィル公立図書館発行の『黒人分館』（*Colored Department*, 1927）、ローゼンワルド基金による実験プログラム、ウェストヴァージニアでのチャールストン（Charleston）事件（1927）

第12章 1929年後期-1935年：大恐慌

モビール黒人分館開館（1931）、ショアーズ調査（1930）、TVAやWPAの図書館プログラム、バーカー『南部の図書館』（1936）

第13章 1936-1940年：大恐慌第2部

グリーソン『南部の黒人と公立図書館』（1941）、アレクサンドリア公立図書館事件（1939）、雇用促進局（WPA）の活動

第14章 1941-1945年：第2次世界大戦

アトランタ大学での黒人図書館員養成開始（1941）、黒人図書館員団体

第15章 1945-1950年：誰のための「勝利の時期」なのか

ダントン調査 (1948)、モントゴメリーの黒人分館開館 (1948)、ルイジアナおよびアラバマ州図書館協会での人種統合問題

第16章 1951-1955年：ブラウン事件に向けて

アラバマおよびノースカロライナ州図書館協会の統合問題 (1951)、ホールデン調査 (1954)、レディックの主張 (1954)、バーミングハムでの図書館理事会をめぐる動き、アラバマとジョージア州図書館協会がアメリカ図書館協会の支部資格喪失 (1954)

第17章 1956-1959年：ポスト・ブラウン事件

リード事件 (1959)

第18章 1960-1961年：公民権運動の進展

グリーンヴィル、メンフィス、ダンヴィル、モビールでの隔離撤廃、『図書館の権利宣言』第5条（人種統合条項）追加、

第19章 1962-1963年：混乱するアメリカ図書館協会

アメリカ図書館協会での支部資格問題、モントゴメリーやアニストンなどアラバマでの隔離撤廃事件、ベル調査 (1963)

第20章 1964-1966年および以後：実現された公民権

フリーダム図書館（ミシシッピ夏期プログラム）、ジョズィー調査 (1965)、ブラウン対ルイジアナ事件 (1966)

これらの事項に関してはすべて本文献レビューで扱っているが、第20章のジョズィー調査とは1965年に『ライブラリー・ジャーナル』に発表された調査結果を指す¹⁴⁷⁾。

このバトルズの『南部公立図書館におけるアフリカ系アメリカ人へのサービス』が評価されるとすると、それは南部公立図書館における黒人を通史としてまとめたという1点においてであろう。それはまたこの領域における便利な参考図書になりうるということでもある。上に掲げた各章が扱った項目はたしかに重要な事柄であり、筆者が文献レビューで扱った事柄がほぼ網羅されて取り上げられている。そうした点ではよくまとめられた本といえる。

しかし本書については少し厳しい評価をする方がよからう。いくつかを取り上げて箇条書きにしておく。

・著者の問題意識は第20章「1964-1966年および以後：実現された公民権」に窺われる。バトルズは1964年公民権法、それに1966年のブラウン対ルイジアナ事件の合衆国最高裁判決が「実現された公民権」を具体的に示すものと考えているようである。確かに法的にはそうであるかもしれない。また第19章ではアメリカ図書館協会の支部資格の問題は取り上げているが、アメリカ図書館協会で大論争になった『公立図書館へのアクセス』¹⁴⁸⁾にはまったく言及がない。『公立図書館へのアクセス』は南部公立図書館での人種隔離を非難する（公立図書館の場合、人種隔離自体は多分に過去の問題になりつつあった）とともに、実態としての人種によるサービスの相違（白人地区に分館が多く、また蔵書数も多いといったこと）を示し、それは南部だけでなく全国にみられるとした。すなわち制度的な人種差別ではなく、実態としての差別に警鐘を鳴らしたのである。ここから不利益をこうむっている人へのサービス、アウトリーチ・サー

ビスが展開していく。この重要な側面を捨象した著者の問題意識に疑問を投げざるをえない。

・バトルズは20の章を設定しているのだが、これは時代区分を意識したものとは思われない。重要な事柄を抽出し、それに時期をあてて、その時期にあてはまる副次的な出来事を組み込んだと思える。例えばアメリカ図書館協会に関わる事柄は、多くの章で記述されているのだが、個別的な出来事として記されており、それがアメリカ図書館協会の歴史のなかでどのような意味と位置づけを持つのか、十分な記述になっているとは思われない。

・上に内容を示した第7章から第20章をみると、バトルズのオリジナルな研究を示した章はない。すべてが筆者の文献レビューが示した、いわば既存の図書（グリーンソン、グラハム、ジョーンズなど）、あるいは雑誌論文からの借用によって本書は執筆されている。

例えば「第15章 1945-1950年：誰のための『勝利の時期』なのか」は、ダントン調査（1948）、モントゴメリーの黒人分館開館（1948）、ルイジアナおよびアラバマ州図書館協会での統合問題を中心としているが、ダントン調査は『ライブラリー・ジャーナル』の論文（注34参照）、モントゴメリーの黒人分館についてはパターンソン・T.グラハムの研究書（注51、92参照）、アラバマ州図書館協会の統合問題はケイラ・B.パーレットなどが1998年の『ライブラリーズ・アンド・カルチャー』に発表した「アラバマ州図書館協会と人種統合」（注120参照）、ルイジアナ州図書館協会についてはスティーヴン・R.ハリスの2003年の論文「公民権とルイジアナ州図書館協会」（注121参照）に依拠している。またとりわけ第15章以降は、アラバマ州の公立図書館が多く取り上げられているが、モントゴメリー、バーミングハム、モビール、アニンストンなどは、グラハムが重点的に調べた研究を援用したもので、オリジナルな研究ではない。

・通史の場合、すべてをオリジナルな研究で執筆するというのは無理な注文であろうが、少なくとも柱とする部分はオリジナルな研究であって欲しいし、図書全体の枠組み、それに時代区分の説明は示して欲しい。そうした願いを持つ評者にとっては、バトルズの本書は期待に沿わない内容であった。

2

ジェイムズ・ボールドウィン（James Baldwin）はマーガレット・ミード（Margaret Mead）との対話で、「ハーレムには当時2つの公共図書館がありました。13歳の頃には、この2つの分館にあるほとんどの本を読んでいました」と述べている¹⁴⁹⁾。一方、ボールドウィンは小説『山に登りて告げよ』（1953）で次のように書いている。

彼はこの通り [42丁目街] が好きだった。といっても、人々や店のせいでなく、公立図書館の巨大な本館の前に四方をへいげいしている石造のライオンどものせいだった。しかし、書物がいっぱい、途方もなく大きなこの建物に入る気にはなれなかった。ハーレムの一劃に住む一員なのだから、市のどの図書館からでも本を借覧する資格はあると思うのだが、なにせ巨大な建物なので、中に入ってみれば、廊下や大理石の階段がやたらにあって、迷路に迷い込み、ほしい本も探せないだろうと思うと、ついぞ足をふみ入れたことはなかった。そんなことになろうものなら、中の白人たちはみな、彼が大きな建物や沢山の書物に不慣れなことに気付いて、憐れんで見るだろう。いつの日か入ってみることにしよう。そのときは、

山手の書物を全部読んでしまったときのことで、そうなったらこの建物だけでなく世界中のどんな建物に入ってもおかしくない貫禄がついているだろう¹⁵⁰⁾。

「山手の書物」とはニューヨーク・パブリック・ライブラリーのハーレム分館を指す。彼（黒人の青年）はニューヨーク・パブリック・ライブラリーの本館の壮大きさと複雑さによって威圧されている。と同時に館内の白人の反応に恐怖を抱いている。これは小説ではあるが、十分にボールドウィンの体験、黒人全体の感覚を表明したものと考えてよからう。実際、この5番街に面する一対のライオン像は立派なもので、図書館の守護者であり、また知識の守護神でもある。しかし比喩的、象徴的にはあるものの、ライオン像が下層階級やマイノリティを威圧して利用を遠ざけてきたとすれば、ライオン像が歴史的に果たした役割は皮肉なものといわざるを得ない。

またアメリカの著名な歴史研究者ジョン・ホープ・フランクリン（John Hope Franklin）は、ノースカロライナ州の州立公文書館・歴史館を訪れたときの模様を「今でもはっきり思い出す」と述べ、次のように記している。

その館長はイェール大学で歴史学の博士号をとった人だった。私が姿を見せるや、職員たちはパニック状態になり、まるで緊急事態が起こったかのようなようだった。そのこと自体が、じつは、歴史的な重みをもっているのである。公文書係員は、率直に、私とその施設を使おうとした最初の黒人であり、その建物を設計した建築家はこのような事態を全く予想していなかったため、手書きの文書やその他の史料を使えるようになるまでには数日かかるだろうと話してくれた。その間に、展示室のひとつを私のための読書室に改装するというのである。これだけでも相当にショッキングなことだったが、アラバマ州の公文書館の女性館長が、私が「ハーヴァード出の黒ん坊」（彼女がこう言ったのである）なのに、南部のレディーにたいして礼儀正しく振る舞う能力をもち合わせているのがわかって、彼女の方がショックを受けたと言った時の滑稽さとはくらべようもない¹⁵¹⁾。

そののち、フランクリンの記述は「国会図書館」（議会図書館）の食堂で食事ができなかったことに続いていく。上記の引用文中、展示室の1つを読書室（閲覧室）に改装するとの記述がある。当然ながら公文書館に閲覧室はあるのだが、同じ机に白人と黒人が席をとり、袖を触れ合わすのを避けるために、閲覧室を急ぎ設けるといっているのである。

ボールドウィンは建物と館内にいる白人に威圧され、ノースカロライナの州立公文書館長は黒人への強固なステレオタイプを抱いていた。これらは『公立図書館へのアクセス』（1963）がいう「直接的差別」や「間接的差別」よりも、いっそう歴史に根ざした深層のものといえるだろう。

注

筆者が『アメリカ公立図書館・人種隔離・アメリカ図書館協会』で、詳述したのは以下の事項である。ヤスト報告（1913）、黒人サービス・ラウンドテーブル（1921-1923）、シャーロット方式とルイヴィル方式およびルイヴィル公立図書館黒人分館、アメリカ図書館協会リッチモンド大会（1936）、人種隔離をめぐる先駆的裁判事例（チャールストン独立学区事件（1928）、イノック・プラット・フリー・ライブラリー事件（1945））、人種隔離をめぐる裁判事例（ダンヴィル公立図書館事件（1960）、ピーターズバーグ公立

川崎：公立図書館史研究における黒人：人種隔離を中心として（文献展望）

図書館事件（1960）、メンフィス公立図書館事件（1960）、モントゴメリー公立図書館事件（1962）、ブラウン事件（1966）、エミリー・リード事件（1960）、『図書館の権利宣言』第5条（人種統合条項）の追加（1961）、「個人会員、支部資格、および施設会員に関する声明」の採択（1962）、『公立図書館へのアクセス』（1963）。また例えば、アメリカ図書館協会アトランタ年次大会（1899）、アトランタ公立図書館の黒人分館、ルイヴィルやハンプトン・インスティテュートでの黒人図書館員養成、ショアーズ調査（1930）、アトランタ大学の修士論文群、エステスやムーンの主張（1960）、ホールデン調査（1964）、ベル調査（1963）などについてもまとまった記述をしている。

- 1) アトランタの特に黒人分館については、黒人分館長をつとめたマクフィーターズの回想が詳しい。Annie L. McPheeters, *Library Service in Black and White: Some Personal Recollections, 1921-1980*, Metuchen, N.J., Scarecrow Press, 1988.
- 2) このプログラムの多くは実験的なプログラムであるが、村落部に図書館サービスを持ち込んだり、プログラムが契機となって黒人学校に図書館主事が導入されたりした。以下を参照。Mary Edna Anders, *The Tennessee Valley Library Council, 1940-1949*, Atlanta, Southeastern Library Association, 1960.
- 3) このプロジェクトについては以下を参照。Donald G. Davis, Jr. and Cheryl Knott Malone, "Reading for Liberation: The Role of Libraries in the 1964 Mississippi Freedom Summer Project," in John Mark Tucker, ed., *Untold Stories: Civil Rights, Libraries, and Black Librarianship*, Champaign, Ill., Graduate School of Library and Information Science, 1998, p. 119-125. 注104も参照。
- 4) *Plessy v. Ferguson*, 163 U.S. 537 (1896).
- 5) *Brown v. Board of Education*, 347 U.S. 483 (1954).
- 6) 施設の人種隔離撤廃の時期については以下を参照。International Research Associates, *Access to Public Libraries*, Chicago, American Library Association, 1963.
- 7) ルイヴィル方式、シャーロット方式を最初に図書館全国雑誌に紹介し、ルイヴィル方式を主張したのがルイヴィル公立図書館長をつとめたヤストで、以下の文献である。William F. Yust, "What of the Black and Yellow Races?" *American Library Association Bulletin*, June 1913, p. 159-167. 両方式の法規面、実態面については以下が詳しい。Eliza Atkins Gleason, *The Southern Negro and the Public Library: A Study of the Government and Administration of Public Library Service to Negroes in the South*, University of Chicago Press, 1941, p. 20-21, 76-77, 80, 154-167 (Chap. 7 "Independent Negro Libraries"). なおグリーンソンは両方式には、図書館費、建物、開館時間、職員の学歴や給与で相違はないとしている。そしてこの分析結果は「通説とは相違する」(p. 167) と述べる。グリーンソンはシャーロット方式に魅力を感じていたが、実践はルイヴィル方式に決定的に傾いていた。
- 8) ルイヴィル公立図書館についての単館史は以下である。Workers in the Service Division of the Work Projects Administration in the State of Kentucky, *Libraries and Lotteries: A History of the Louisville Public Library*, Cynthiana, Kentucky, Hobson Book Store, 1944. ルイヴィルの黒人を研究したのが以下である。George C. Wright, *Life Behind a Veil: Blacks in Louisville, Kentucky, 1865-1930*, Baton Rouge, Louisiana State University Press, 1985. ルイヴィル公立図書館や職員による文献として例えば以下がある。Louisville Free Public Library, *Colored Branch: Louisville Free Public Library*, The Library, 1909; Rachel D. Harris, "Work with Children at the Colored Branch of the Louisville Free Public Library," *Library Journal*, April 1910, p. 160-161; "Colored Branches of the Louisville Public Library," *ibid.*, December 1915, p. 872-874; William F. Yust, "What of the Black and Yellow Races," *op.cit.*; George T. Settle, "The Louisville Free Public Library," *The Southern Workman*, October 1914, p. 537-540; Rachel D. Harris, "The Advantages of Colored Branch Libraries," *ibid.*, July 1915, p. 385-391; Louisville Free Public Library, *Colored Department, Louisville Free Public Library*, The Library, c.1927;

- Thomas F. Blue, "A Successful Library Experiment," *Opportunity*, August 1924, p. 244-246. また最近の研究としては以下がある。Cheryl Knott Malone, "Louisville Free Public Library's Racially Segregated Branches, 1905-35," *Register of the Kentucky Historical Society*, vol. 93, no. 2, 1995, p. 159-179. なお黒人図書館員の養成については以下を参照。Arthur Clinton Gunn, "Early Training for Black Librarian in the U.S.: A History of the Hampton Institute Library School and the Establishment of the Atlanta University School of Library Service," Ph.D. dissertation, University of Pittsburgh, 1986. なおルイヴィルおよびケンタッキー州での黒人図書館サービスについては以下が詳しい。Reinette F. Jones, *Library Service to African Americans in Kentucky, from Reconstruction Era to the 1960s*, Jefferson, N.C., McFarland and Company, 2002.
- 9) 例えば南東部図書館協会のいわば正史が以下である。Ellis E. Tucker, ed., *The Southeastern Library Association: Its History and Its Honorary Members, 1920-1980*, Tucker, GA, Southeastern Library Association, 1980. さらに以下も参考になる。Mary Edna Anders, "The Southeastern Library Association, 1920-1950," *Southeastern Librarian*, Spring 1956, p. 9-39; Mary Edna Anders, "The Southeastern Library Association, 1920-1950," *Southeastern Librarian*, Summer 1956, p. 61-81. リージョナルな団体や雑誌を取り上げるのは本稿にそぐわないが、図書館史研究に重要である。例えば常に指摘されるウィリアム・ヤストの1913年論文 (William F. Yust, "What of the Black and Yellow Races?" *op.cit.*) に対応する分析が以下に掲載されており基礎資料になる。George T. Settle, "Status of Work with Negroes in the Territory Embraced in the Southeastern Library Association," *Proceedings of Southeastern Library Association Fourth Biennial Conference, Signal Mountain, Chattanooga, Tennessee, April 22-24, 1916*, p. 47-51.
- 10) 黒人図書館員の養成については以下を参照。Arthur Clinton Gunn, "Early Training for Black Librarians in the U.S.," *op.cit.*; Robert Sidney Martin and Orvin Lee Shiflett, "Hampton, Fisk, and Atlanta: The Foundations, the American Library Association, and Library Education for Blacks, 1925-1941," *Libraries and Culture*, vol. 31, no. 2, 1996, p. 298-325; 小林卓「20世紀前半のアメリカにおける黒人図書館員教育：ハンプトン学院図書館学校を中心に」『図書館界』vol. 45, 1993, p. 308-322; Sarah Bogle and Tommie Dora Barker, *A Study of the Library School Situation in Southern States*, Chicago, American Library Association, 1931. ボーグルの文献は南部での図書館学教育の状況を州ごとにまとめ、さらに司書の受給関係に触れている。黒人図書館員教育についてはハンプトンに加えてアトランタ大学を示唆しているが (p. 43)、これは1941年に実現するので先見の明のある報告といえる。なお1939年にハンプトン図書館学校が閉鎖され、アメリカ図書館協会はすぐに黒人図書館員養成の現状と課題を調査している。その報告書が以下で基本的な事実を知るのに役立つ。Tommie Dora Barker, *Memorandum on the Need in the South for a Library School or Schools for Negroes*, American Library Association, Board of Education for Librarianship, 1939.
- 11) Rice Estes, "Segregated Libraries," *Library Journal*, December 1960, p. 4418-4421.
- 12) 1999年大会の研究は進んでいないが、以下が黒人問題を指摘している。Dennis Thomison, *A History of the American Library Association, 1876-1972*, Chicago, American Library Association, 1978, p. 46; Wayne A. Wiegand, *The Politics of An Emerging Profession: The American Library Association, 1876-1917*, Westport, Conn., Greenwood Press, 1986, p. 109 [『司書職の出現と政治：アメリカ図書館協会 1876-1917』川崎良孝・吉田右子・村上加代子訳, 京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2007, p. 156-157].
- 13) Benjamin Powell, "The President's Report to Council," *American Library Association Bulletin*, July-August 1960, p. 589; Grace T. Stevenson, "Memo to Members," *American Library Association Bulletin*, May 1960, p. 364.

川崎：公立図書館史研究における黒人：人種隔離を中心として（文献展望）

- 14) William F. Yust, "What of the Black and Yellow Races?" *op.cit.*
- 15) 黒人サービス・ラウンドテーブルの記録は以下を参照。Ernestine Rose, "Work with Negroes Round Table," *American Library Association Bulletin*, July 1921, p. 200-201; Ernestine Rose, "Work with Negroes Round Table," *American Library Association Bulletin*, July 1922, p. 361-366; George T. Settle, "Work with Negroes Round Table," *American Library Association Bulletin*, July 1923, p. 274-279.
- 16) リッチモンド大会と事件については以下が詳しい。John L. Preer, "'This Year—Richmond!': The 1936 Meeting of the American Library Association," *Libraries and Culture*, vol. 39, no. 2, 2004, p. 137-160.
- 17) 方針については以下を参照。"Report of the Committee on Racial Discrimination," *American Library Association Bulletin*, January 1937, p. 37-38; Dennis Thomison, *A History of the American Library Association, 1876-1972*, *op.cit.*, p.132.
- 18) 各州に1つの支部という決定については以下を参照。David Clift, "Memo to Members," *American Library Association Bulletin*, March 1956, p. 10; *ibid.*, June 1956, p. 335; "To the Record: ALA Council," *American Library Association Bulletin*, September 1954, p. 445.
- 19) Casper LeRoy Jordan and E.J. Josey, "A Chronology of Events in Black Librarianship," E.J. Josey and Ann Allen Shockley, eds., *Handbook of Black Librarianship*, Littleton, Colo., Libraries Unlimited, 1977, p. 16. なおこの「黒人図書館学年表」はChickenBones: A Journal for Literary and Artistic African-America Themesのホームページ上で継続的に項目が追加されており、参考になる (<http://www.nathanielturner.com/blacklibrarians.htm>)。ChickenBones: A Journal (<http://www.nathanielturner.com>)の主目的は、黒人による文書資料や絶版本などへのアクセスを提供することにある。さらにアメリカ図書館協会のホームページでも「アフリカ系アメリカ人の図書館発展年表」(Timeline in Library Development for African Americans)を掲載している (<http://www.ala.org/ala/online/resources/selectedarticles/aframtimeline/cfm>)。この年表の特徴は、合衆国全体の図書館発展年表と対比して、黒人への図書館サービスでの重要点を示していることにある。
- 20) William F. Yust, "What of the Black and Yellow Races?" *op.cit.*
- 21) George T. Settle, "Status of Work with Negroes in the Territory Embraced in the Southeastern Library Association," *op.cit.*, p. 47-51.
- 22) 例えば、時代は下がるが1948年にメアリー・ロスロックは南東諸州協力図書館調査 (Southeastern States Cooperative Library Survey) との名称で、公立、学校、大学図書館に関するマクロな調査を行っている。そこでの関心は南部の州単位での図書館空白地帯の状況と図書館への資金投入に集約されているが、これはアメリカ図書館協会の全国計画などと関係している。Mary U. Rothrock, "Nine States Look at Their Libraries," *The Southern Packet: A Monthly Review of Southern Books and Ideas*, vol. 4, October 1948, p. 1-5.
- 23) Ernestine Rose, "Work with Negroes Round Table," *American Library Association Bulletin*, July 1922, p. 362-364.
- 24) [Julia Ideson] "Progress South," in George T. Settle, "Work with Negroes Round Table," *American Library Association Bulletin*, July 1923, p. 276.
- 25) Louis Shores, "Public Library Service to Negroes: Existing Facilities for Training the Negro Compiled from Questionnaires Sent to Librarians of Over Eighty Cities," *Library Journal*, February 1930, p. 150-154.
- 26) Louis R. Wilson and Edward A. Wight, *County Library Service in the South: A Study of the Rosenwald County Library Demonstration*, University of Chicago Press, 1935.
- 27) *ibid.*, p. 229.
- 28) Tommie Dora Barker, *Libraries of the South: A Report on Developments, 1930-1935*, Chicago, American Library Association, 1936.

- 29) Louis R. Wilson, *The Geography of Reading: A Study of the Distribution and Status of Libraries in the United States*, Chicago, American Library Association and University of Chicago Press, 1938.
- 30) *ibid.*, p. 32-34, 284-285, 288, 326, 342, 344, 352, 423など.
- 31) Eliza Atkins Gleason, *The Southern Negro and the Public Library, op.cit.*
- 32) *Library Conference Held Under the Auspices of the Carnegie Corporation of New York and the General Education Board, March 14-15, 1941*, Atlanta, GA, Atlanta University, 1941.
- 33) Gleason, "Public Library Service and the Negro," in *ibid.*, p. 37-48.
- 34) Emily Miller Danton, "South Does Less Restricting," *Library Journal*, vol. 73, 1948, p. 990-1002.
- 35) Louis R. Wilson and Marion A. Milczewski, eds., *Libraries of the Southeast: A Report of the Southeastern States Cooperative Library Survey, 1946-1947*, University of North Carolina Press, 1949.
- 36) *ibid.*, p. 251.
- 37) Anna Holden, "The Color Line in Southern Libraries," *New South*, January 1954, p. 1-4.
- 38) L.D. Reddick, "Where Can a Southern Negro Read a Book?" in *ibid.*, p. 5-11.
- 39) Dorothy McAllister, "Library Service in Mississippi," *Library Journal*, March 1955, p. 536-539.
- 40) Mary Edna Anders, "The Development of Public Library Service in the Southeastern States, 1895-1950," DLS dissertation, Columbia University, 1958.
- 41) *ibid.*, p. 234.
- 42) Eric Moon, "Editorial: The Silent Subject," *Library Journal*, December 1960, p. 4436-4437.
- 43) 施設の人種隔離撤廃の時期については以下を参照。International Research Associates, *Access to Public Libraries, op.cit.*
- 44) カー事件の判決は以下を参照。Kerr v. Enoch Pratt Free Library of Baltimore City, 149 F.2d 212 (1945); Kerr v. Enoch Pratt Free Library of Baltimore City, 54 F.Supp. 514 (1944). なお先駆的な事例としてはウェスト・ヴァージニア州のチャールストン独立学区区事件 (1928)、ヴァージニア州のアレクサンドリア公立図書館事件 (1939) があり、以下を参照。Anderson H. Brown v. The Board of Education of Charleston Independent School District, 106 W.Va. 476 (1928); S.J. Ackerman, "Samuel Wilbert Tucker: The Unsung Hero of the School Desegregation Movement," *Journal of Black in Higher Education*, no. 28, July 2000, p. 98-103.
- 45) ダンヴィル事件の判決は以下を参照。"Government Facilities: Libraries, Virginia (*Gladys Giles v. The Library Advisory Committee of the City of Danville*)," *Race Relations Law Reporter*, 1960, p. 1140-1141; "Government Facilities: Libraries, Virginia," *Race Relations Law Reporter*, 1960, p. 528; "Administrative Agencies: Corporations, Libraries, Virginia (Articles of Incorporation of Danville Library Foundation)," *Race Relations Law Reporter*, 1960, p. 909-910. 以下は主要な雑誌記事である。"Danville Plans Private Library after Closing of Public Libraries," *Library Journal*, September 1960, p. 2902-2903; "The Danville Story: Open Again But Not An 'Open' Library," *Library Journal*, November 1960, p. 3942-3943; "Freedom to Read Limited in Danville, Virginia," *Newsletter on Intellectual Freedom*, December 1960, p. 1-2.
- 46) ピーターズバーグ事件は以下に記事がある。"Virginia Library Remains Closed," *Library Journal*, November 15, 1960, p. 4122; "Petersburg Opens Library on Integrated Basis," *Library Journal*, December 1960, p. 4440.
- 47) モントゴメリー事件の判決は以下を参照。Robert L. Cobb v. Montgomery Library Board, 207 F.Supp. 880 (1962); "Governmental Facilities: Libraries: Alabama," *Race Relations Law Reporter*, vol. 7, 1962, p. 839-843. 以下は雑誌記事である。" 'Read In' at Montgomery," *Wilson Library*

川崎：公立図書館史研究における黒人：人種隔離を中心として（文献展望）

- Bulletin*, 1962, p. 722; “‘Vertical Integration’ Installed at Montgomery Public Library,” *Library Journal*, 1962, p. 2856.
- 48) メンフィス事件については以下の資料がある。“Governmental Facilities: Libraries: Tennessee,” *Race Relations Law Reporter*, vol. 5, 1960, p. 1271; *Turner v. Randolph*, 195 F.Supp. 677 (1961); “Integration: An Interm Report,” *Wilson Library Bulletin*, April 1961, p. 632.
- 49) 例えば以下の記事のヴァージニア・L.ジョーンズ (Virginia L. Jones) の発言を参照。“Segregation in Libraries: Negro Librarians Give Their Views,” *Wilson Library Bulletin*, May 1961, p. 707-710.
- 50) 以下がブラウン事件の判決である。*Brown v. State of Louisiana*, 86 S.Ct. 719 (1966); *State of Louisiana v. Henry Brown et al.*, 168 So.2d 104 (1964).
- 51) リード事件については以下がある。Clark E. Center, Jr., “Of Rabbits, Martin Luther King, Jr., and the Alabama Public Library Service,” *Alabama Librarian*, Winter 1996, p. 16-20; Patterson T. Graham, *A Right to Read: Segregation and Civil Rights in Alabama’s Public Libraries, 1900-1965*, University of Alabama Press, 2002, p. 102-111.
- 52) リード事件で問題の発端となったのは以下の絵本である。Garth Williams, *The Rabbits’ Wedding*, New York, Harper and Row, 1958 [『しろいうさぎとくろいうさぎ』まつおかきょうこ訳, 福音館書店, 1965].
- 53) リード事件で問題となった「精選図書一覧」は以下である。“Notable Books 1958,” *Library Journal*, March, 1959, p. 816-817.
- 54) 例えばムーン自身は図書館関係雑誌が果たした役割について、以下で意見を表明している。「図書館関係雑誌とエリック・ムーン：インタビュー（聞き手：フレデリック・スティロー）」メアリー・リー・バンディ、フレデリック・スティロー編著『アメリカ図書館界と積極的活動主義：1962-1973年』川崎良孝・森田千幸・村上加代子訳, 京都大学図書館情報学研究会発行, 日本図書館協会発売, 2005, p. 129-146. さらにムーンの以下の図書も参照。Eric Moon, *A Desire to Learn: Selected Writings*, Metuchen, N.J., Scarecrow Press, 1993.
- 55) Rice Estes, “Segregated Libraries,” *op.cit.*
- 56) Eric Moon, “Editorial: The Silent Subject,” *op.cit.*
- 57) “Highlights of the Midwinter Meeting,” *American Library Association Bulletin*, March 1961, p. 233; “Report of the Special Committee on Civil Liberties Adopted at the Midwinter 1961 Meeting,” *American Library Association Bulletin*, June 1961, p. 486-487; Archie L. McNeal, “Progress Report from the Intellectual Freedom Committee,” *Newsletter on Intellectual Freedom*, March 1961, p. 1.
- 58) “Dues and Rights: ALA Discusses ‘Libraries for All’ at Cleveland,” *Library Journal*, August 1961, p. 2587; “Integration and Censorship,” *Library Journal*, March 1962, p. 904.
- 59) “Statement on Individual Membership, Chapter Status, and Institutional Membership,” *American Library Association Bulletin*, July/August 1962, p. 637. 以下の記事が関係している。“Integration and Censorship,” *op.cit.*, p. 904-908, 937; Eli M. Oboler, “Attitudes on Segregation: How ALA Compares with Other Professional Associations,” *Library Journal*, December 1961, p. 4233-4239; “Editorial; Who’s Out of Step?” *Library Journal*, March 1962, p. 936-937; “Highlights of the Miami Beach Conference,” *American Library Association Bulletin*, July/August 1962, p. 635-638; “Highlights of the Midwinter Meeting,” *American Library Association Bulletin*, March 1963, p. 232.
- 60) International Research Associates, *Access to Public Libraries*, *op.cit.* 『公立図書館へのアクセス』をめぐる論議は以下を参照。Harry N. Peterson, *Access to the D.C. Public Library: Comments on the Methodology and Conclusions of the “Access to Public Libraries” Report*, Washington D.C., The Library, August 8, 1963; “The Access to Public Libraries Study.”

- American Library Association Bulletin*, September 1963, p. 742-744; “The Underprivileged Reader,” *Wilson Library Bulletin*, September 1963, p. 65-67; “‘The Access Study’: An Lj Forum,” *Library Journal*, December 1963, p. 4685-4710; Herbert Gans, “The Access Survey: From the Social Scientist’s Viewpoint,” *Wilson Library Bulletin*, December 1963, p. 336-341, 368; “Report on the Study of *Access to Public Libraries*,” *American Library Association Bulletin*, April 1964, p. 299-304; Archie L. McNeal, “Access to Libraries,” *Southeastern Librarian*, Winter 1963, p. 207-210.
- 61) 人種隔離と公立図書館に関する修士論文は以下である。なお網羅性に欠けているかもしれない。 Barbara Marie Adkins, “A History of Public Library Service to Negroes in Atlanta, Georgia,” 1951; Lucretia Jeanette Parker, “A Study of Integration in Public Library Service in Thirteen Southern States,” 1953; Rosebud Harris Tillman, “The History of Public Library Service to Negroes in Little Rock, Arkansas, 1917-1951,” 1953; Rheba Palmer Hoffman, “A History of Public Library Services to Negroes in Memphis, Tennessee,” 1955; Lillian Taylor Wright, “Thomas Fountain Blue, Pioneer Librarian, 1866-1935,” 1955; G.S. Barnes, “History of the Public Library Service to Negroes in Galveston, Texas, 1904-1955,” 1957; John Lee Curry, “A History of Public Library Services to Negroes in Jacksonville, Florida,” 1957; Issac R. Barfield, “A History of the Miami Public Library, Miami, Florida,” 1958; C.E. Davis, “Survey of the Public Library Service to Negroes in Greenville County, South Carolina,” 1958; Mary Ellen McCrary, “A History of Public Library Service to Negroes in Nashville, Tennessee, 1916-1958,” 1959; Irene Cross Hansbrough, “Public Library Service to Negroes in Knoxville, Tennessee,” 1959; Birdie Turner James, “History and Development of Public Library Service to Negroes in Mobile, Alabama, 1931-1959,” 1961; Pennie Williams Dickey, “A History of Public Library Service for Negroes in Jackson, Mississippi, 1950-1957,” 1962; Neloweze Williams Cooper, “The History of Public Library Service to Negroes in Savannah, Georgia,” 1960; Juanita Louise Jones Crittenden, “The History of Public Library Service to Negroes in Columbus, Georgia, 1831-1959,” 1960; Emma Ruth Fonville, “A History of Public Library Service to Negroes in Bessemer, Alabama,” 1962; Bernice Lloyd Bell, “Integration in Public Library Service in Thirteen Southern States, 1954-1962,” 1963; Bessie Rivers Grayson, “The History of Public Library Service for Negroes in Montgomery, Alabama,” 1965.
- 62) Bernice Lloyd Bell, *op.cit.*, p. 126-131 (“Appendix B: Questionnaire”).
- 63) *ibid.*, p. 99 (“Table 5: Number of Cities in the Thirteen Southern States Offering Integrated Service in the Main Public Library”); Eliza Atkins Gleason, *The Southern Negro and the Public Library*, *op.cit.*, p. 83; Lucretia Jeanette Parker, “A Study of Integration in Public Library Service in Thirteen Southern States,” *op.cit.*, p. 70.
- 64) Bernice Lloyd Bell, *op.cit.*, p. 100-115.
- 65) Bernice Lloyd Bell, *ibid.*, p. 24-96 (“Chapter II: The Status of Integration in Public Library Service in the Thirteen Southern States”).
- 66) *ibid.*, p.99.
- 67) Bernice Lloyd Bell, “Public Library Integration in Thirteen Southern States,” *Library Journal*, December 1963, p. 4713-4715.
- 68) 以下の図書で24名の寄稿者がジョズィーの多様な業績や貢献を記している。Ismail Abdullahi, *E.J. Josey: An Activist Librarian*, Metuchen, N.J., Scarecrow Press, 1992.
- 69) ジョズィーに関する文献目録は以下を参照。Ismail Abdullahi, “Bibliography of Works By and About E.J. Josey,” in *ibid.*, p. 231-254.
- 70) E.J. Josey, ed., *The Black Librarian in America*, Metuchen, N.J., Scarecrow Press, 1970. なお本書については1994年に改訂版が出版されている。改訂版では30名が寄稿しているが、1970年版に執

川崎：公立図書館史研究における黒人：人種隔離を中心として（文献展望）

- 筆したのはその内の11名である。E.J. Josey, ed., *The Black Librarian in America Revisited*, Metuchen, N.J., Scarecrow Press, 1994.
- 71) E.J. Josey, ed., *ibid.*, ix, 1970.
- 72) E.J. Josey, ed., *What Black Librarians Are Saying*, Metuchen, N.J., Scarecrow Press, 1972.
- 73) *ibid.*, p. 5.
- 74) Annette L. Phinazee, ed., *The Black Librarian in the Southeast: Eminiscences, Activities, Challenges, Papers Presented for a Colloquium Sponsored by the School of Library Science, North Carolina Central University, October 8-9, 1976*, Durham, N.C., North Carolina Central University, 1980.
- 75) E.J. Josey and Kenneth E. Peebles, Jr., eds., *Opportunities for Minorities in Librarianship*, Metuchen, N.J., Scarecrow Press, 1977.
- 76) *ibid.*, p. 57-94.
- 77) 例えば以下がある。“Racial Minority Groups,” in Marcia J. Nauratil, *Public Libraries and Nontraditional Clienteles*, Westport, Conn., Greenwood Press, 1985, p. 99-128; A.P. Marshall, “Service to Afro-Americans,” in Sidney L. Jackson, Eleanor B. Herling and E.J. Josey, *A Century of Service: Librarianship in the United States and Canada*, Chicago, American Library Association, 1976, p. 62-78.
- 78) E.J. Josey and Ann Allen Shockley, eds., *Handbook of Black Librarianship*, *op.cit.* この本は第2版が刊行されている。E.J. Josey and M.L. DeLoach, eds., *Handbook of Black Librarianship*, 2nd ed., Lanham, MD, Scarecrow Press, 2000.
- 79) Virginia Lacy Jones “How Long, Oh How Long?” *Library Journal*, December 1962, p. 445.
- 80) Donnarae MacCann, “Libraries for Immigrants and ‘Minorities’ : A Study in Contrasts,” in Donnarae MacCann, ed., *Social Responsibility in Librarianship*, Jefferson, N.C., McFarland, 1989, p. 103.
- 81) Klaus Musmann, “The Ugly Side of Librarianship: Segregation in Library Services from 1900 to 1950,” in John Mark Tucker, ed., *Untold Stories*, *op.cit.*, p. 78.
- 82) Eliza Atkins Gleason, *The Southern Negro and the Public Library*, *op.cit.* 包括的という意味では、「おわりに」で取り上げるデイヴィッド・M.バトルズ (David M. Battles) の業績も参考になる。
- 83) John Mark Tucker, ed., *Untold Stories*, *op.cit.*
- 84) Edward A. Goedecken, “Civil Rights, Libraries, and African-American Librarianship, 1954-1994: A Bibliographic Essay,” in *ibid.*, p. 188-199.
- 85) *ibid.*, p. 190.
- 86) Rosemary R. DuMont, “Race in American Librarianship: Attitudes of the Library Professions,” *Journal of Library History*, vol. 21, 1986, p. 488-509.
- 87) A.P. Marshall, “Service to Afro-Americans,” in Sidney L. Jackson, E.B. Herling and E.J. Josey, eds., *A Century of Service*, *op.cit.*, p. 62-78.
- 88) E.J. Josey, “Race Issues in Library History,” in Wayne A. Wiegand and Donald G. Davis, Jr., eds., *Encyclopedia of Library History*, New York, Garland Publishing, 1994, p. 533-537.
- 89) Casper LeRoy Jordan and E.J. Josey, “A Chronology of Events in Black Librarianship,” *op.cit.*, 1977, p. 15-23.
- 90) Eric Moon, *A Desire to Learn*, *op.cit.*
- 91) Cheryl Knott Malone, “Accommodating Access: ‘Colored’ Carnegie Libraries, 1905-1925,” Ph.D. dissertation, University of Texas-Austin, 1996.
- 92) Patterson T. Graham, “Segregation and Civil Rights in Alabama’s Public Libraries, 1918-1965,” Ph.D. dissertation, University of Alabama, 1998; Patterson T. Graham, *A Right to Read*, *op.cit.*

- 93) A.P. Marshall, "Service to Afro-Americans," in Sidney L. Jackson, Eleanor B. Herling and E.J. Josey, *A Century of Service*, *op.cit.*
- 94) Rosemary R. DuMont, "Race in American Librarianship: Attitudes of the Library Professions," *op.cit.*
- 95) Stephen Cresswell, "The Last Days of Jim Crow in Southern Libraries," *Libraries and Culture*, vol. 31 no. 3 and 4, 1996, p. 557-573.
- 96) Klaus Musmann, "The Ugly Side of Librarianship: Segregation in Library Services from 1900 to 1950," in John Mark Tucker, ed., *Untold Stories*, *op.cit.*, p. 78-92.
- 97) Michael Fultz, "Black Public Libraries in the South in the Era of De Jure Segregation," *Libraries and Culture*, vol. 41, no. 3, 2006, p. 337-359.
- 98) Annie L. McPheeters, *Library Service in Black and White: Some Personal Recollections, 1921-1980*, *op.cit.*
- 99) *ibid.*, p. 135.
- 100) Cheryl Knott Malone, "Accommodating Access: 'Colored' Carnegie Libraries, 1905-1925," *op.cit.*
- 101) マローン博士は博士論文をもとに以下の論文を発表している。Cheryl Knott Malone, "Louisville Free Public Library's Racially Segregated Branches, 1905-35," *op.cit.*; "Autonomy and Accommodation: Houston's Colored Carnegie Library, 1907-1922," *Libraries and Culture*, vol. 34, no. 2, 1999, p. 95-112; "Books for Black Children: Public Library Collections in Louisville and Nashville, 1915-1925," *Library Quarterly*, vol. 70, no. 2, 2000, p. 179-200; "The Adult Collection at Nashville's Negro Public Library, 1915-1916," in Robert S. Freeman and David M. Hovde, eds., *Libraries to the People. Histories of Outreach*, Jefferson, N.C., McFarland, 2003, p. 148-156.
- 102) John Mark Tucker, ed., *Untold Stories*, *op.cit.*
- 103) Dan R. Lee, "From Segregation to Integration: Library Services for Blacks in South Carolina," in *ibid.*, p. 93-109.
- 104) Donald G. Davis, Jr. and Cheryl Knott Malone, "Reading for Liberation: The Role of Libraries in the 1964 Mississippi Freedom Summer Project," *op.cit.* フリーダム図書館について当時の資料としては例えば以下がある。Virginia Steele, "'Freedom Libraries' of the Mississippi Summer Project," *Southeastern Librarian*, Summer 1965, p. 77-81. 同雑誌の編集者は、公民権運動に関わった図書館員の発言はほとんどないと指摘し、このスタイルの記録を貴重な文献と強調している。
- 2002年に発表された下記の論文は、ミシシッピー州における図書館サービスの歴史を、南北戦争後の1866年からブラウン判決の1954年までを概観している。公立図書館の前史にかなりスペースを割き、大学図書館や図書館員の養成にも触れているが、図書館サービスの発展については19世紀には宗教団体などの取り組み、20世紀前半はカーネギーやローゼンワルド基金などの取り組み、戦後は州の関与などを重視している。Jama Lumumba and Ann Branton, "Historical Survey of Library Services for Blacks in Mississippi: 1866 to 1954," *Mississippi Libraries*, vol. 66, no. 2, Summer 2002, p. 37-40.
- 105) Andrea L. Williams, "A History of Holland Public Library, Wichita Falls, Texas, 1934-1968," in John Mark Tucker, ed., *Untold Stories*, *op.cit.*, p. 62-77.
- 106) Jesse C. Smith, ed., *Notable Black American Women*, Detroit, MI, Gale Research, 1992, 1996.
- 107) Jessie Carney Smith, "Black Women, Civil Rights, & Libraries," in John Mark Tucker, ed., *Untold Stories*, *op.cit.*, p. 141-150.
- 108) Edward A. Goedeken, "Civil Rights, Libraries, and African-American Librarianship, 1954-1994: A Bibliographic Essay," *op.cit.*, p. 188-199.
- 109) S.J. Ackerman, "Samuel Wilbert Tucker: The Unsung Hero of the School Desegregation

- Movement,” *op.cit.*
- 110) Patterson T. Graham, “Segregation and Civil Rights in Alabama’s Public Libraries, 1918-1965,” *op.cit.*; Patterson T. Graham, *A Right to Read*, *op.cit.*
- 111) Reinette F. Jones, *Library Service to African Americans in Kentucky, from Reconstruction Era to the 1960s*, *op.cit.*
- 112) Benjamin F. Speller, Jr., *Educating Black Librarians, Papers from the 50th Anniversary Celebration of the School of Library and Information Sciences, North Carolina Central University*, Jefferson, N.C., McFarland, 1991.
- 113) E.J. Josey, “A Foreword,” in *ibid.*, vii-xiii.
- 114) Miles M. Jackson, “Summary and Implications,” in *ibid.*, p. 151.
- 115) Arthur Clinton Gunn, “Early Training for Black Librarian in the U.S.,” *op.cit.*
- 116) Rosemary Ruhig DuMont, “The Educating of Black Librarians: An Historical Perspective,” *Journal of Education for Library and Information Science*, vol. 26, 1986, p. 233-249.
- 117) Robert Sidney Martin and Orvin Lee Shiflett, “Hampton, Fisk, and Atlanta,” *op.cit.*, 注10も参照。
- 118) 黒人図書館員養成史については以下の文献も指摘しておく。O. Lee Shiflett, “The American Library Association’s Quest for a Black Library School,” *Journal of Education for Library and Information Science*, vol. 35, no. 1, 1994, p. 68-72.
- 119) Allison M. Sutton, “Bridging the Gap in Early Library Education History for African Americans: The Negro Teacher-Librarian Training Program (1936-1939),” *Journal of Negro Education*, vol. 74, no. 2, 2005, p. 138-150.
- 120) Kayla B. Barrett and Barbara A. Bishop, “Integration and the Alabama Library Association: Not So Black and White,” *Libraries and Culture*, vol. 33, no. 2, 1998, p. 141-161.
- 121) Steven R. Harris, “Civil Rights and the Louisiana Library Association: Stumbling toward Integration,” *Libraries and Culture*, vol. 38, no. 4, 2003, p. 322-350.
- 122) John L. Preer, “‘This Year—Richmond!’,” *op.cit.*, p. 137-160.
- 123) James V. Carmichael, Jr., “Tommie Dora Barker and Southern Librarianship,” Ph.D. dissertation, University of North Carolina, 1988.
- 124) James V. Carmichael, Jr., “Atlanta’s Female Librarians, 1883-1915,” *Journal of Library History*, vol. 21, no. 2, 1986, p. 376-399.
- 125) *ibid.*, p. 384, 394.
- 126) James V. Carmichael, Jr., “Women in Southern Library Education, 1905-1945,” *Library Quarterly*, vol. 62, no. 2, 1992, p. 169-216.
- 127) Stephanie J. Shaw, *What a Woman Ought to Be and to Do*, Univerisity of Chicago Press, 1996.
- 128) *ibid.*, p.137.
- 129) 図書館や黒人女性図書館員については以下で触れられている。*ibid.*, p.137, 141-142, 151-155, 171-174, 194, 204-206, 209.
- 130) Mary L. Bundy and F.L. Stielow, eds., *Activism in American Librarianship, 1962-1973*, Westport, Conn., Greenwood Press, 1987 [『アメリカ図書館界と積極的活動主義：1962-1973年』*op.cit.*].
- 131) E.J.ジョズィー「公民権運動とアメリカ図書館界：開幕」 in *ibid.*, p. 19-27.
- 132) *ibid.*, p. 27.
- 133) ウィリアム・カニンガム「アメリカ図書館協会ブラック・コーカス：最初の4年間」 in *ibid.*, p. 149-156.
- 134) ヘレン・ウィリアムズ「白人図書館学校での黒人の経験、1962-1973年：移りの時代」 in *ibid.*,

- p. 195-202.
- 135) 「ブラック・コーカスによる人種隔離（撤廃）についての決議」(Black Caucus on Desegregation) in *ibid.*, p. 247.
- 136) Dan R. Lee, “Faith Cabin Libraries: A Study of an Alternative Library Service in the Segregated South, 1932-1960,” *Libraries and Culture*, vol. 26, no. 1, 1991, p. 169-182.
- 137) Patrick M. Valentine, “Steel, Cotton, and Tobacco: Philanthropy and Public Libraries in North Carolina, 1900-1940,” *Libraries and Culture*, vol. 31, no. 2, 1996, p. 272-298.
- 138) *ibid.*, p. 276-277.
- 139) *ibid.*, p. 283.
- 140) Louise S. Robbins, “Changing the Geography of Reading in a Southern Border State: The Rosenwald Fund and the WPA in Oklahoma,” *Libraries and Culture*, vol. 40, no. 3, 2005, p. 353-366.
- 141) ジュリア・A.ハースバーガー、ロウ・スア、アダム・L.マレー「第5章 コミュニティの果実と土台：グリーンズボロ・カーネギー黒人図書館、1904-1964年」ジョン・E.ブッシュマン、グロリア・J.レッキー編著『場としての図書館：歴史、コミュニティ、文化』川崎良孝・久野和子・村上加代子訳、京都大学図書館情報学研究会発行、日本図書館協会発売、2008、p. 117-148.
- 142) Alma Dawson, “Celebrating African-American Librarians and Librarianship,” *Library Trends*, vol. 49, no. 1, 2000, p. 49-87.
- 143) Betty L. Jenkins, “A White Librarian in Black Harlem,” *Library Quarterly*, vol. 60, 1990, p. 216-231.
- 144) Sarah A. Anderson, ““The Place to Go” : The 135th Street Branch Library and the Harlem Renaissance,” *Library Quarterly*, vol. 73, no. 4, 2003, p. 383-421.
- 145) Ethelene Whitmire, “Breaking the Color Barrier: Regina Andrews and the New York Public Library,” *Libraries and Culture*, vol. 42, no. 4, 2007, p. 409-421.
- 146) David M. Battles, *The History of Public Library Access for African Americans in the South, or, Leaving Behind the Plow*, Lanham, Maryland, Scarecrow, 2008.
- 147) E.J. Josey, “A Mouthful of Civil Rights and an Empty Stomach,” *Library Journal*, vol. 90, no. 2, January 1965, p. 202-205.
- 148) International Research Associates, *Access to Public Libraries, op.cit.*
- 149) Margaret Mead and James Baldwin, *A Rap on Race*, Philadelphia, Lippincott Company, 1971, p. 39.
- 150) ジェイムズ・ボールドウィン『山に登りて告げよ』齊藤数衛訳、黒人文学全集、第3巻、早川書房、1968、p. 39-40。なお「山手の書物」とはハーレム分館である。
- 151) ジョン・ホープ・フランクリン『人種と歴史』本田創造監訳、岩波書店、1993、p. 39。この出来事は1950年代の前半と推察できる。